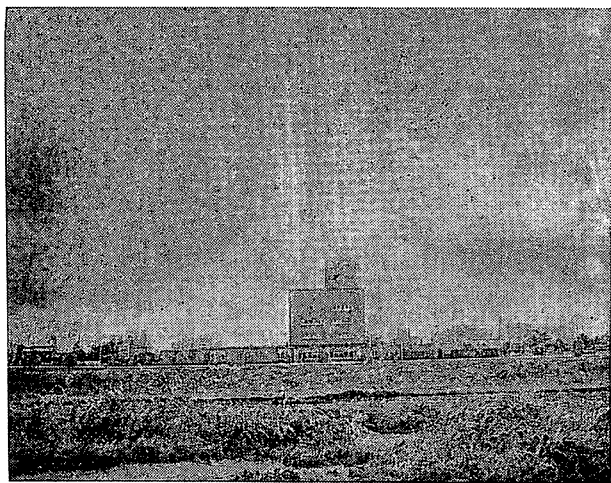


第三章

水郷を襲う強権の津波



元荒川土手から、越谷市役所を望む

1 ヶハイエナシ企業登場す

対東京ワックス交渉は一つの山を越した。連夜の深夜団交でみせた団結の力を新会社導入阻止に向けて集中すべき時であった。

共闘会議ではこの一カ月間の闘争を総括し、九日を期限とする日世導入阻止に向けて方針討議を行った。そのねらいは、当局ベースの導入を引き延ばし、「組合と合意しない限り新会社を入れないこと」を確約させることであった。そして、東京ワックスとの契約切れによって、委託会社なき就労の事実をつくり上げ、雇用責任・業務管理責任を市当局につきつけ、何らかの形での直営化を勝ちとることにあった。

「しかしどうしても市が一方的に契約を交わしたらどうするのか」

「新会社と雇用契約を交わさず、自主就労を続けられよ。この空白が長期化すれば、市が雇用責任をとらなければならなくなる」

「しかし、市が新会社に業務を押しつけてそれを組合が拒否すれば、今の従業員が解雇されるこ

とになるのではないか。」

「何年も最賃ギリギリで病院のために働いてきた年配者を簡単に首切れるだろうか。県でも学校警備を無人化したくても、二百名の高齢者の団結には勝てないんだ」

「しかし、畑知事は一応革新の出身だが、島村はゴリゴリの保守でウルトラ超過激派だからね」

「解雇するなら、無期限ストで完全に業務拒否するしかない。委託は関係ない、どうでもいい仕事だっていうんだから、交換や清掃をストップして目にも見せてやればいい」

慎重論、主戦論が飛び交ったが、結論は容易に出ない。「とにかく、広く世論に訴えて闘争への理解の輪を広げ、市長を孤立させねばならない。マスコミや議会対策、そして広汎な市民への情宣を強化しよう」と、結局は方針のあいまいなままに運動を大衆化しようということになった。この日から再び連日、駅や市役所、病院でのピラマキが始まった。

病院から日世との説明会を五月二日行うという知らせが入った。「説明会の前に会社に乗り返って、会社の実情を聞き出し、争議状況を説明して契約を思いとどませよう」という意見が埼玉側から出された。

だがこの頃、埼玉側に対し、夜間の電話取次ぎ、受信業務を剥奪し、「留守番電話」で置きかえようとする攻撃がかけられていた。「留守番電話設置阻止」の檄が森田委員長から飛ばされ、東部一分会、二分會が二二日合同で対県交渉を行い、その後も各地で情宣活動や署名活動をやった

第三章 水郷を襲う強権の津波

いた。共闘会議に日常的に参加していた青木、藤本、ヒロキ、阿藤、安原らは二つの闘争を抱え昼は休みなく活動し、夜は夜警として夜更け、早朝の学校警備員として疲れ切っていた。

越谷市職労の役員や活動的な組合員もまた事情は同じであった。職場への合理化、昼休み窓口設置問題、参議員選挙などの相次ぐ攻撃がかかっており、連日のように職場オルグや団交が行われていたからである。

このため、「説明会の前に日世を叩く」という方針が見送られて、二日の説明会の話を聞いてからということになった。だが、この数日のズレによって日世の進出意志が決定的になったのであった。

五月一日、越谷地区のメーデーに東京ワックス労組が参加した。埼委労東一分会からも当時



とにかく委託会社さえ入れて責任のがれ……市長方針

分会長の飯島老人を先頭に何人も老警備員が参加し、東京ワックス労組の年配者と肩を並べてデモ行進した。東京ワックス労組の誰もが、生れて初めてのデモであった。すでに初夏の暑い陽射しが、軒の低い宿場町にはさまれた旧日光街道にも遠慮会釈なく射しこんでいた。汗まみれになって大きな声でシュプレヒコールを叫び、道行く人にビラを渡す。「委託会社は出て行け」「市長は元請け責任をとれ」などと書かれたプラカードが肩に喰い込む。この日の集会では、委員長の水の上、書記長の馬場、埼委労の藤本の三人が並んで壇上に立ち、東京ワックス闘争への支援を要請し、万雷の拍手で激励された。

五月二日、ついに、「憐日世」が登場した。全員にビリビリ緊張した空気が走る。厚見課長が、内海静雄社長、早乙女専務らを紹介した。

二人の第一印象は良くなかった。内海は色黒のズングリした男で、ゲジゲジ眉毛に奥目のドングリ眼。一見して純情なヤクザの若頭風であった。早乙女は一寸形容しがたいくずれた表情の中年男であった。ふてぶてしさと世の中を見くびったような、なげやりなところが同居している。いわばうらぶれた会社ゴロとでもいった風態である。

果せるかな早乙女がベラベラと喋り始めた。曰く「日世は従業員本位で明るく働ける会社です。お年寄りの人でも安心して働けるといって、遠くの事業所からわざわざ会社に給料をとり

来て、私共と話して帰るのが楽しみだというおばあさんもいるくらいです。今度、皆さんのご了解を得てうちの会社で働いてもらえれば、決して今までのようなご苦労はおかけしませんから、云々」

「そんな無内容なあいさつは結構。今日は、会社側のきれいな事を聞ききたんじゃない。日世という会社がどういふ会社か、我々の要求を受け入れてくれるのか、労働条件や就業規則がどうなっているのか、こちらの聞くことだけ答えてくれればいいんだ」と、山本が早乙女の話の腰をぼっきりと折った。

様々な質問をして分ったことは次のようなことである。日世は社長の内海がアルバイトの硝子ぶきから始めた会社であり、昨年暮に総合ビル管理会社として、資本金一千六百で設立されたばかりであること。主なビル管理の事業所としては荒川区役所、小管浄水場、草加市役所などがあること等々。

労働条件は事業所ごとに（委託料がちがうから）多少ことなるが、初めての人でも日給三、二〇〇円くらい。都内では四、〇〇〇円くらいだという。償与は夏、冬各一カ月分近いものは出す。保険は全員加入を原則としており、社会保険組合に加入して事務的にもきっちりしている。話だけ聞いていると、平均的な委託労働者の条件以上のもは出しているようであった。

だが、定年制について質問をするにわかに歯切れが悪くなった。清掃員の定年は六〇歳。そ

れ以上で、継続雇用を希望する者には嘱託として一年ごとに契約する。給料は基本給の三割減ということであった。

「定年なんて絶対認められないからね」「それなら今いる大半は雇わないっていうのと同じじゃない」と小母ちゃんや年配者たちが色めきたった。

早乙女 これは会社の一般的な就業規則ですから、ここでも杓子定規にするというのではなく、今おられる皆さんは、ずっと同じ給料で働いてもらいますから。

安原 今年はよいとしても、そういう規定があるなら、いずれ定年だからといっておい出されないとも限らない。終身雇用、同一労働条件を前提にした独自の労働協約をここで結んでくれないと困る。

早乙女 しかし委託契約は、市と会社の問題であって、協約が結ばれないからといって契約するなといわれても会社の経営権、決定権がそれで拘束される訳にはいかないんじゃないでしょうか。

山本 労働協約が結ばれない限り雇用に応じるわけにはいかない。自分の給料や条件が分らないのに、採用して下さいと頼める訳じゃないか。

内海 それは、契約ができて、うちが雇うということになってから話し合えばいいんじゃないか。

青木 市との契約後に労働条件が折り合わなければどうなるのか。会社はワックスのように契約を破棄するのか。

内海 そんなことはしません。納得してもらえなければ仕方ないじゃないですか。無理に働いてもらわなくても良いんですから。

内海社長のぶっきらぼうな言い方は、今となっては何でも無遠慮に物を言う彼の率直な性格から来たものだと考えられる。だが、そのヤクザっぽい風貌（これは今も日世の社員自身が認めている通りである）と相まって、平然と労働者を使い捨てる暴力的なものとしてしか受けとれなかった。組合員や支援者たちに、会社に対する不信と怒りが爆発した。会場は騒然として野次が飛びかい、厚見たちは「困ったことを言う」というような表情を浮かべていた。

内海 まだうちがやらせて貰うと決った訳じゃない。こんなガアガア言われたって困るんだ。

安原 それでは会社の最終態度は決っていないというわけか。委託を受けるのはいつ最終的に決定するのか。

第二回目の協議会は五月七日（火）と決められた。それまでに会社側は態度を決め、委託を引き受けるなら午後一時に出席するということであった。

話し合いの最後になってこの会社が労働者の収奪^{ビシベキ}によって成長してきた典型的な労務供給会社であることが分ってきた。だが委託料の大幅引き上げによって、日世が社内基準を緩和してでも



妻みをきかせる(?)日世首脳部

市立病院においては組合の要求を一定程度は満たすという「誠意」を示してきている。この見せかけの「良心的ポーズ」をつき崩さなければ、雇用契約を拒否して自主管理を要求して実力行使するには無理がある。共闘会議は日世という会社の内容をもっと知る必要がある。そのためには本社交渉、事業所訪問をして労働者たちと連帯を勝ちとるため、連休明けの六日に労働者の半分がストを打って都内まで出かけようということになった。

2 業界アウトサイダーの本性

五月六日(火)午前八時、東武越谷駅に執行委員六名、青木、安原らの特別執行委員、若干の組合員と共闘会議の労働者が集まった。

東武北千住から営団地下鉄千代田線に乗り換え、町屋駅で下りる。さらに現在では東京で唯一

残っている都電荒川線に乗って熊野神社前に向かう。

「都電なんて久しぶりだね」と、何人かのばあちゃんたちが感激したように言う。

「都電どころか東京なんて年に一、二度しか来ないもんね。ほんとに家や車が多くて、目が回っちゃったよ」と越谷の農家育ちの秋谷がびっくりしたように言う。「こんなことで東京の下町見物できるなんて、思っても見なかったよ」

このばあちゃん達と若者との奇妙なおのぼり集団は、荒川右岸の下町を物珍しそうに眺めながら榊日世の本社へやってきた。

「これじゃまるでしもた屋じゃないか」とヒロキが驚いたように叫ぶ。どんな立派な会社かと思っていた本社社屋は、その辺りに立ち並んでいる普通の民家とまるで変りがない。一階は資材倉庫になっているらしく、狭い非常階段のわきに「株式会社日世」という看板が掲かっているのは二階への入口を示していたのだ。

「やあ、皆さん何ですかおそろいで」と奥から説明会の時に来ていた川前と名乗った管理課長がにやにや笑いながら出てきた。

安原 病院の会議室できれいな事ばかり聞いてもらちがあきませんから、今日は会社見学に寄せてもらったんですよ。大層ご立派な本社ですが、土地建物は会社のものですか。



日世に入ったら笑っていられなくなる

川前 とんでもない借り物ですよ。家賃もバカにならないんだけど、ビル管理会社はこんな木造の方が親しみがあって良いでしょう。まあ、立ち話も何ですからどうぞお上りになって下さい。もっとも、社長も専務もおりませんから大した話ではありませんがね。

川前との話は清掃業務が中心だった。お役所の仕事はうるさいばかりで金にならないとか、常勤の清掃より定期清掃の方が儲かる。日世では屈強なアルバイトを日給一万円で雇って、一日に何ヶ所ものワックス洗いをしている。「うちでは、これの特掃班と呼んでいますよ、大学の応援団の学生アルバイトなども結構いるんですよ」と川前は意味あり気に笑った。

組合代表は、説明会での会社側の労務姿勢について厳しく抗議し、「市立病院との契約を思いとどまるよう社長と専務に伝えるように」と申入れた。

応接室の壁には、自民党代議士の政治団体の名で日世に対する「感謝状」が額に入れて掲げられていた。「貴社は長年にわたって環境整備に尽力されたのでここに表彰するものである」などという文句がわざとらしく書かれている。政治献金に対する礼状でもあるのだろう。日世という会社が、利権的な代議士の力を借り

て、公共事業体の管理業務の委託を広げてきたことを明白に物語っていた。

日世を出て荒川区役所へ向かう。熊野神社前の停留所に向かうまで「日世は高齢者使い捨て止めよ」というビラを配りながら、停留所へ歩いて戻った。

再び都電に乗って荒川区役所へ行く。市職の佐々木委員長が先に組合事務所に来て待っていてくれた。ここで日世が今年の四月に業務委託を受けた経過や日世の評判等を聞く。荒川区や草加の指名決定の裏には、自治省出身の自民党A代議士が動いたからだという。東京都水道局からは、死亡した従業員をそのまま雇用し続けたように見せかけていたのが発覚して、今年から水道局関係の指名から外されてしまったという、とんでもない事実まで明らかとなった。とにかく、事ごとに政治家の名前をちらつかせたり、労働基準法を守らず従業員の定着率が悪いことなどで、都内の自治労での評判は良くないという。

昼休みには、区役所の中にある「日世従業員控室」を訪問する。意外なことにどう連絡を受けたのか早乙女が先回りしていた。早乙女の了解を得て、日世での待遇や仕事の内容を聞く。早乙女がいるせいか、余り多くを語りたがらない。大半の者が、前の会社から引き続き働いていた関係で、「日世のことはよく分らない」という人が多かった。

早乙女は相変らずにやにや笑いながら、「仲良くやっていきましょよ。皆さんが動けば動くほど委託料は上がるんだから大いにやって下さいよ。今年は市の言いなりで請けても、越谷市に

は隠し財産が一杯あるから、これからどんどんふんだくるつもりですよ」と会社の腹の中を少し見せながら、さかんに「共闘」のポーズを見せた。

「とにかく自治体の言いなりになったんじや、業者も従業員も細るばかりでしょう。

業界団体に入っていないと言われるが、あんなしみつけたれた談合でこそ委託料のつりあげをしようたつて無理だ。表面はなごやかだが裏では足の引つ張りあい。うちは談合なんかせず、正々堂々と必要経費は要求していく主義ですからね」

「これは一筋縄でいく会社じゃない。自治体当局には自民党代議士を使い、組合とこじれば裏から手を回して懐柔してくるつもりだろう」と青木や安原は、日世が業者談合と抜けがけだけで世渡りする多くの委託会社と一味ちがう政治力をもった会社であることを、改めて知らされた思いであった。

荒川区役所での話し合いを終えると一行は再び町屋から、北千住に戻り、草加市役所へ向かった。ここもまた日世がこの年から庁舎清掃業務を請けおったばかりで、十名足らずの清掃婦が働いているという。

草加市役所の中を手わけして清掃員たちを探す。何人かの清掃員たちに話しかけたが、「仕事申だから」「私は新しく入ったばかりだから古い人に聞いて下さい」と何かにおびえたように、なかなかうちとけて話そうとしない。

代々の業者に仕え、十年近くも草加市役所で働いてきたAさんを探しだし、労働条件や日世のことを話してくれるように病院の小母さんたちが頼んだ。だがAさんは、「別に話すこともない。私らあといくらも働けないんだから、組合なんかつくる積りもない。仕事中に邪魔しないでほしい」と、仕事の手を休めずにつっけんどんに答えるだけであった。

それでも、何人かの人たちから聞いた限りでは、給料はまちまちで、お互い同士知らないまま、「あの人は私より多いんじゃないか」と疑心暗鬼しているようであった。

「会社から話すなと連絡が来てんじゃないか」

「それにしても、私らと同じ身分で、大した給料ももらってないんだから、話ぐらいしてくれどもいいじゃないかね」

「みんな顔付きが明るくないもんね」

と小母ちゃんたちは、日世の従業員たちのおどおどした暗さを感じたらしい。

「日世に雇われたら、物も言えなくなってしまうだろうか。それなら、いくら給料は安うても、好きなことが言えただけ東京ワックスの方がましだね。私は絶対日世に雇ってもらいたくない」と笠原や渡辺が同じような感想を述べた。

越谷に戻って、市職の組合事務所でも共闘会議の総括が行われた。水上が小母ちゃんたちの意見を代表して、「私らあんなひどい会社に雇われたくない。こうなったら、市長さんに何とかお願

いして日世との契約を思いとどまってもらわねば」と決意を述べた。一同も異論はない。

「それでは、明日から九日までの三日間市役所前に座り込んで、市長との直接交渉を要求し、日世との契約を絶対阻止するまで頑張るということでいいですね」と、安原が東京ワックスの組合員に念を押した。

「いいです。よろしく願います」と、小母さんたちが声を揃えて、いつものとぼけた口調で決意表明した。

「明日は組合員の半数がストを打って午前中は座り込みと対市交渉。午後は日世との団交です。八日は午後から半数がストを打って座り込みと東京ワックスの団交です。九日は再度半数がストを打って対市長交渉。夕方五時半から総決起集会です。これだけやっても、市が日世との契約を強行した場合は、十日から無期限ストで業者導入を阻止していきます。この三日間は、半分の人数で仕事を続けていかねばなりませんから、全員一人も休まないように頑張ってください」と青木が、今後の大まかな行動予定を再確認して、東京ワックス労組役員たちは全員の日程を分担をするため病院へ戻っていった。

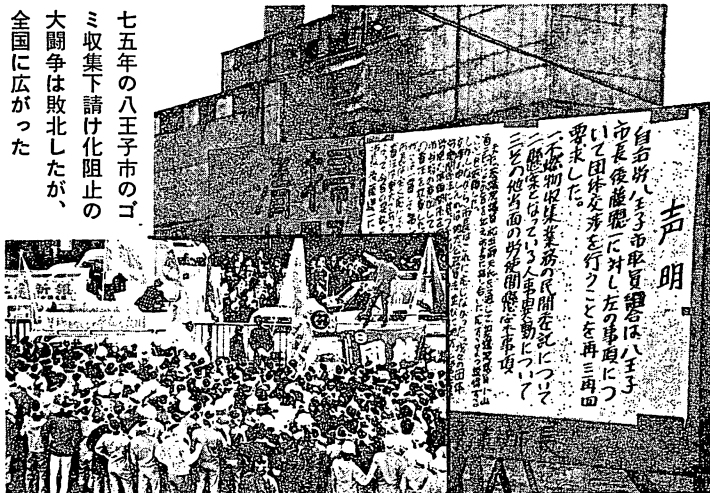
「いよいよ決戦だね」と山本が夕方になって病院からやって来た。「終業時に水上さんが三日間の分担を決めていたが、みんな熱気が入ってる。日世がいかにかひどい会社か自分の目で見てきたことを、みんなに一生懸命話していたよ」

「埼委労も東一分会は全力動員。西部地区からも若手はできるだけ来てもらおう積りだ。市職の方も明日からの座り込み、大丈夫でしょうね」

「役員総動員という訳にはいかんけど、専従者と病院や清掃の非番者、青年婦人部で休みのとれる人を毎日交代で張りつける。だが、毎日の動きが激しいので役員でも全体の流れがつかまされていけない。情宣を強化する必要がある」

埼委労の組合員からすれば市職の取り組みの体制は今一つもの足りない。この一ヵ月、毎日毎日病院に通いつめて闘ってきた者からすれば、もっと大衆的な取り組みが欲しいところだ。青木は仲間をさとした。

「市職は大きな組織だし、課題も多い。我々だって、東一以外の役員は全然来てくれない。明日からの行動も委員長や三役に呼びかけている



七五年の八王子市のゴミ収集下請け化阻止の大闘争は敗北したが、全国に広がった

が難しいだろう。埼委労本部だって、結局は県警備員のことしか考えていないのだ。そういう意味では、自治労としては、委託の問題にこれだけ取り組んでくれているところは他にないよ」

全国の自治労の中では、下請け化に反対して直営を守り抜いた例はいくつかある。だが、越谷市職のように下請けされていたところの組織化を勝ちとり、直営化要求の闘争を闘っているところは極めて少ない。いったん下請け化されたり、もともと下請けの委託業務の労働者の組織化は総評全国一般の各組合に任されている。そういう意味では、越谷市職は全国的にも例のない闘いを委託労組と共にやって来たことになる。越谷市職は、この他にも地域の問題や障害者運動にも早くから取り組み、組合事務所には様々な市民、労働者の出入りも多い。組合事務所に一歩足を踏み入れた時、その開放的な雰囲気は誰しも感じるであろう。様々な不十分さはあっても、越谷市職の支援抜きにこの闘いは勝利しえなかったのは事実である。

3 市役所前にテントを張る

「早乙女、俺は越谷をあまりやりたくねえよ。あの連中は無茶苦茶だ。会社の回りにベタバタビ

ラをはりやがって、みっともないいたらねえぞ」。内海は越谷に向かうご自慢の電話つきのだットサンの中で専務の早乙女にこぼした。

「何を言ってるんです。せっかくここまで来たんじゃないですか。弱音を吐いちゃ困りますよ。今年は五月十日からだから五千万ほどしかいきませんが、来年は年間七千万の物件ですよ。これだけまとまったものはざらにない。会社の利益もそうだが、信用がまるで違ってくる。今さら後にはひけませんよ」

「そう言っても、組合が強すぎるよ。下手して会社をぶっ壊されちゃ元も子もないんだぜ」

「そんなことありませんよ。たかが労働組合じゃないですか。火つけて燃やそうなんて言ってる訳じゃない。いくらでかいこと言っても、基本は経済要求なんですから、どっかで折り合いがつかますよ。裏から手を回せば、何とかなるんじゃないですか。いずれにせよ。午前中に市長の腹をもう一度確めて、今日の説明会ではどんなことがあっても引き受けると言い切るんですよ。そうすりゃ奴らも諦めて条件交渉になっちゃうんですから」と、早乙女は内海の弱腰をなじるように、確信あり気に言い切った。

「分った。ま、お前がやれるって言うんなら大丈夫だろう」

だが、越谷市役所に着いた時、二人が見たものは、彼らの想像をはるかに越える東京ワックス労組のすさまじい意気込みであった。玄関前に大きなテントが張られ、組合員や支援者が忙しそ

うに出入りしている。何人かの組合員が市民にビラを配っている。

「おい、何だあれは」と内海は異様な物を見たように早乙女を振り返った。

「テント闘争って奴でしょう。ほら、水俣病の窒素や都庁のところでよく座り込んでいる奴ですよ。別に珍しいもんじゃないですよ」と早乙女は事もなげに言ったが、昨日会社に押しかけて来た次の日には、座り込みに入った組合側の行動力には舌をまいた。

裏口からこっそりと市庁舎に入り、内海らはまっすぐに助役室へ入った。藤倉助役は窓の側に立って、眼下のテントを見ていたらしく、内海と早乙女が入って来たのを見て、気ぜわしそうに話しかけてきた。

「連中はいつからあんなこと始めたんですか」。あいさつが済むと早乙女は助役に早速聞いた。

「今朝方から始めて、始業前にはもう座りこんでいたらしい。困ったもんだ。わしが注意しても聞き入れんし、かと言って力づくで追い払う訳にもいかん」

「彼らの要求は何ですか」

「これだよ。ここに書かれていることは本当なのかね」と藤倉は一枚のビラを示した。

政治家使って割り込み

越谷市民の皆さん!……病院当局が「良い会社」という㈱日世は表面では「働く者の生活を

第一に」と言いながら、東京都水道局から労基法違反、死亡者の雇用続行によって、入札からおろされたという札つきの悪質業者で、社内でも一人一人給料をかえて労働者を欺して使うという、悪知恵の働く会社です。今年から「地元優先」を無視して割りこんだ草加市や荒川区では、自民党の天野議員も動いたといわれ、ビルメン協会にも入っていないアウトサイダーの業者です。

市は雇用責任を免れたい一心で、とんでもない業者を入れようとしているのです。……

市長は労組と話し合え
十日に業者導入すれば 無期限スト決行！

市民の皆さん！ 労働者の皆さん！ 委託制度のもとで高齢者が何の保障もなくコキ使われて始めて運営される市立病院や庁舎管理とは何でしょうか。

市があくまで「お前らは関係ない」というなら民間労組の権利をもって市立病院の業務一切を拒否せざるをえません。ご支援とご理解をお願いします！

越谷市立病院の清掃・電話交換・守衛で働く東京ワックス労組／悪徳ピンハネ業者、
追放！ 越谷市立病院の直営化を求める共闘会議／越谷市職労／埼委労／支援越谷地区
労

トでも電話交換手が一名しか仕事しなくて混乱した。無期ストになれば交換はもとより清掃にだって支障は出てくる。お宅としてはどうする積りかね」

「委託先にご迷惑をおかけすることは絶対ありません」と内海がキッパリ言った。「奴らがうちでは仕事をしないと言うなら、代りの人間を会社で手当してでも業務には絶対に支障を来たしませんよ」

社長もようやく腹を決めた様だ。会社の恥部を公表されて怒り心頭に発したらしい。だが、組合とてすんなりとピケ破りを認めるだろうか。作業員以外にも外部から応援を頼まなければならぬだろうと、早乙女は頭の中でめまぐるしく計算を働かせた。

「会社側がスンナリ仕事でできれば良いんですが、こじれたら相当の人数も要ります。通常の事態ではないのですから、とかく出費もかさむし、最終的には組合の条件要求を相当呑まねば解決できません。事務局とつめてきた契約金額では難しい事態になってきましたが、市の方ではその点考慮してもらえるんでしょうか」と、早乙女はわざと渋い表情で探りを入れた。

「市長はどうしても業者にやらせると言っているし、他の業者は組合があるというだけで指名願いも出してこない。お宅に何とかしてもらうしかないんだから、何とか穏便に行くなら多少の出費もやむを得ないだろう。市長が社長をしているコミュニティセンターの仕事もあるし、ほら、あそこに見える水道企業団の管理だってある。病院だけではもうからないだろうが、悪いように

しないからぜひ引き受けてもらいたい」と藤倉は窓の外のストを見下して言った。

(思う壺にはまってきた。市長も社長もその気ならなんとでもなる)と早乙女は内心ほくそ笑み
をもらした……

※ このような会話が言葉通りあったかどうか定かではない。だが、当事者たちの言動を総合した場
合、いずれかの場面でこのような内容のやりとりがあったことは間違いない。対話の相手が島村市長
や山崎事務局長であった場合もあるという。

テントは前日の夕方に運び込まれていた。早朝から共闘会議の若者がテントを張り、八時には
組合員の半分が集まり、ピラ配りを始めた。

藤倉助役が数名の管理職を連れてやって来たのは午前九時頃である。渋い表情をしてテントの
撤去を促したが、「力づくで撤去すると言うなら市長を先頭に立ててやってこい」と野次られ
た。必死で訴える清掃員らの勢いに押されて藤倉は「退去を命ずる」と言うことができずに引き
下ってしまった。こうなれば、テントは公認されたようなものである。

長いコードを引っ張って、庁舎内から玄関を通して電気コードを引っ張り、電気釜で飯を炊
く。市民がびっくりして見ている前で握り飯をつくり、早朝から何も食わずに働き通しだった若
者たちがかぶりついた。

昼前には埼玉労東一分会の飯田分会長が、年配者を二、三人連れてやってきた。兄が大阪の学

校警備員労組の書記長をしているSも激励にきた。後にSは本部派として青木らと、たもとを分つのだが、当時は小母さん達の闘いに熱い連帯を表明していたのである。

暖かい陽射しの下で、組合員たちはテントの中に敷いたじゅうたんに座り込み、屈託なげにお喋りをしていた。昼休みになって佐々木たちが出て来て、市長交渉申入れの経過を報告した。

「市長は委託労働者と会うつもりはない。あくまで委託会社の労使問題で解決しろと言うだけだ。助役や事務局長が会うだけでもと説得したらしいが、過去の法違反は東京ワックスの問題で市は関係ないとつっぱねているようだ」

「こうなったら根くらべ。市長が折れてでるまで座り込みを続けるしかない。こちらに道理があり、市民が理解してくれる限りいざれ出てこざるを得まい」

東京ワックス労組組合員の卒直な感情としては、とにかく市長に出てもらって「今まで迷惑をかけて済まなかったと謝ってもらいたい。今すぐ直営化できないとしても、市自身が元請けとして委託労働者の身分や生活に何らかの保障してもらえばいい、というものであった。だが、市長は「直営化」という言葉を反射的に嫌悪し、「俺は関係ない」とダダッ子の様に言い張っているのだ。そこには、苦勞知らずの坊ちゃん育ち、たえず周囲の者を見下して育ってきた権力者のおごりが見られた。組合員が要求しているのは、その「おごり」を捨て、自分の親のような年配者のことを親味になって考えて欲しいということであった。

そこが為政者や大企業の経営者には分らない。労使問題や公害紛争がこじれるのはこのような「おごり」が彼らにあるからである。「力の対決」は往々にして権力者の意地と面子によって、被支配者の「気持」が踏みにじられるところから生じる。ペトナムやイランの闘いで権力側の論理が最後に破綻したが、それは力あるものの「おごり」の故であったのだ。

「とにかく市長さんに会わせてもらうまで頑張りとう」と、小母ちゃん達は力強く確認し合って、午後からの日世との団交にのぞむことになった。

午後一時から市庁舎の地下会議室で病院当局の立ち合いの下に行われた日世との二回目の説明会は最初から対決ムードであった。

社長の内海は冒頭に「市からの要請があり、このたび市立病院の総合管理の委託を引き受けることになりました」とあいさつし、早乙女は「会社に雇用されることを希望する方とだけ労働条件についてお話したい。組合員以外の方は当社と関係ないのでご遠慮願いたい」と労組と共闘会議の分断を押しつけてきた。会場はたちまち野次に包まれ、内海や早乙女も紅潮して大声を上げて怒鳴るように答え、激しい応酬が続いた。

労組 市に対して直営化を要求して交渉中だ、日世は手を引け。

日世 市から要請があったから皆さんを雇用しようとしている。嫌な人はやめて貰ってもよい。

労組 市と契約するといってもさせない。日世にそんな資格はない。

日世 会社としてはあくまで委託契約をする。明日にでも契約は交す。組合がストをやっても会社としては仕事を続ける。

労組 スト破りは許さない。仮に契約しても誰も日世の従業員としては働かないだろう。

日世 関東は広い。人はどこからでも集めてくれる。

日世は平然としてスト破りを宣言し、強行方針が市長の了解のもとに決定されたことを暗に表明した。労働条件についても「会社の決めること。会社の規定に従ってもらう」と労働協約を事前にとり交す意志のないことも明らかにしたのである。

ついに「会社側は皆さんがうちの会社に入らないと言うなら話し合いをしても仕方ない」と交渉打ち切りを宣告。内海や早乙女は勝ち誇ったように立ち上り、すがりついて訴える組合員を押し除けて会場を出て行った。

安原が内海を睨みつけ、「市長の口車に乗って無理を通そうとしても駄目だ。泥沼化すれば、いずれ市は日世内部



市役所前でテントを張る

の労使問題だと言って責任を取ってはくれないぞ」と諭した。内海はふてくされたように、「そんなことは分っている。分つていても会社としてはやらなきゃ仕方ない」と本音を述べ、誰が会社をそそのかしているかを明らかにした。

佐々木らは事務局長、管理課長に対し「全員雇用と我々には約束しながら日世は人を他所から連れてくると言っているではないか」と約束違反を追求した。山崎らは「それは組合が雇用に応じないという場合の話で、日世との雇用に応ずる人は誰でも市が責任をもって雇用させる」と弁明した。

佐々木 ストライキは労組としての当然の権利。市が日世と契約を交して従業員を追いだそうとしても、五年以上現に病院で働いてきた労働者の就業の事実は法的にも十分争える。

山崎 だから、日世の従業員として働いてほしい。

正木 スト破りを公言しているとは穏やかではない。市職が動員指令を出してピケットを張ったらどうする積りか。

厚見 市長のことだから、前の病院争議と同じように警察に排除を要請するかも知れない。

山本 そんなことになったら病院中が大混乱になる。市民や患者にまで迷惑をかけたらどうするの
のか。

山崎 事務局としてはそのような事態だけは避けたい。何とかならないだろうか。

佐々木 とにかく市長が委託労働者に会って卒直に訴えに耳をかすことだ。制度的には今すぐ直営化は無理でも、何らかの形で元請け責任をとることが明らかにされれば今年は日世との雇用に応じてよい。

山崎 それなら何とか助役とも相談して、事態が收拾できるように努力したい。

山崎は必死であった。この四月に事務局長になるまで、職員課長として、市職との交渉窓口で苦勞を重ねてきただけに、組合の要求や行動が市長の言う程筋の通らないものではないことを知っている。その反面、市長の組合嫌悪も徹底しているだけに、並み大抵のことでは市長を引き出すことができないのも知っていたのである。結局山崎はこの当時の心身の無理がたたって長期療養を要する身となり事務局長を辞任する。市長は非情にも、この辞表を慰留するどころか、職員的身分まで解任してしまうのである。

共闘会議では、この説明会を総括して、①市長の方針としてはあくまで委託制度を再検討する気持がない。②会社のスト破りについては市長も了解している。市長は事務当局が約束した（いかなる事態でも全員雇用の）約束を破っても良いと考えている。③会社は、本社従業員や外部の助っ人を動員してでもスト破りをする積りだ——と市および会社の姿勢を分析した。

強硬方針の張本人は市長一人。市の幹部は最悪事態を避けたいと動揺している。社会的に市長の不当さを広くアピールするため、契約後の無期限ストではなく、強力な大衆運動で組合の反対

意志を広く社会的に明らかにし、市長を孤立させて行こうということになった。

このため、市職が委託問題で越谷全市に新聞の折込みチラシを配布すること。ストライキを繰り上げ、契約前に全面ストを打ち、市民・患者の協力を求める。市会議員に事情を話し、各政党に混乱回避の要請を求める——という方針を全組合員の討議のもとに決定した。

夜に入って山崎事務局長にスト通告書を手渡し、重ねて「契約延期」「市長交渉」を申入れた。市長の強硬方針がどのような事態を生むか思い知ってもらうために、「明日の交換ストでは保安要員を置かない。一切の交換業務を拒否する」という通告に対し、山崎は「何としてでもそれだけは止めてもらいたい。とに角、市長との話し合いが出来るよう全力を尽す」と焦燥した表情で答えた。説明会後の市幹部の協議では、市長はあくまで「会社に任せる。俺は会う必要はない」の一点張りであったという。

4 日世、スト破り要員を募集

この夜遅くまで病院の組合事務所に何人かの共闘会議の労働者が残っていた。明日からのスト

ライキに備え、立看板やビラを作っていた。夜中過ぎてから、突然電話がけたたましく鳴り響いた。「誰だろう」と青木が受話器を取り上げると山本の興奮した声が飛び込んできた。

「大変だっ、日世が従業員募集の広告を出したぞ。うん、読売の広告だ。二段抜ききの囲みになっている。越谷市立病院勤務の正社員急募とはっきり書いてある。男女清掃員若干名、警備若干名、電話交換手若干名となっている。その分だけの従業員のクビを切ろうということははっきりしている。今からそっちへ行く」とまくしたてるように言って山本は電話を切った。

「若干名募集と言うのは、組合をやっている労働者だけ首を切るといふことか、全員解雇して会社の人間を補充するのに足りない分だけ募集するのとはっきりしない。いずれにせよ、この広告を出すためには何日か前から準備しておかなくちゃならないから、病院当局が全員雇用を約束している間から解雇策動をしていたことはっきりした証拠になる」と安原。

「組合との最終交渉の前に広告を出している以上、組合が雇用拒否をしたから部外者を入れるという理屈もなり立たなくなる。雇用する前から最低でも若干名の解雇を準備していたことになり不当労働行為にもなるし、市自体の背信行為も追及できる」と青木も色めき立った。

「これで一挙に態勢ばん回だ。今からすぐ局長や課長を追及しよう」と山本が勢込んで連絡を取ったが、山崎は助役らと交渉中と見えてまだ自宅に帰っていなかった。厚見は就寝中であつた。「厚見さん、おやすみの所悪いけど会社側の意図がはっきりした。そう、スト破り要員を募集し

てたんだよ。何日も前から準備してね。知らないって、ふざけちゃ困るよ。あんたらが全員雇用なんて言ってる間に着々と解雇準備をしてたんだ。責任とって貰うからね、今すぐそっちへ行くから申訳ないけど起きていて下さいよ」

山本、加藤、阿藤の三人が直ちに、市内にある厚見の自宅へ出かけた。厚見の自宅は平方であり、先祖伝来の自作農であった。市長宅以上の敷地で邸内にテニス場まであるほどだ。厚見は、島村市長とは縁戚関係にもあり、「俺は市長だって間違っていると思っただけでけんかしてでも何でもはつきり言うよ」と日頃から自慢している程である。

深夜の訪問にもかかわらず厚見は家人を起こして湯茶の用意をして待っていた。

「俺はもち論知らねえよ。会社がスト破りの積りで募集しているかどうかも分んねえよ。昨日の話し合いの前に決めていたとしたら問題だが、それは会社としての一般的な準備だと言われたら市としても関与できないよ」と、厚見はのらくらと責任逃れをした。だが、厚見がこの事実をはつきり知っており、手を貸してまでいたことは、山本らも知らなかった。

厚見の態度が煮え切らないことを帰って来た阿藤らから聞いた共闘会議は思案した。厚見がどうごま化しようと、会社側の不法策動の明白な証拠だ。助役や市長にしてもここまでの細かい対策を知らされてはいるまい。何としてでもこの事実を広くバクロし、今日、明日に迫った契約だけは延期させねばならない。すでに、初夏の早い日の出が迫っていた。「今から事務局長の家へ行

市には全員雇用、解雇準備していた(株)日世 スト破りには變力と対抗! 市民患者が困る、関係ないと言われ

「越谷市から取れるだけ」とる(株)日世。労働紛争に割り込み委託料つりあげ

越谷市から取れるだけ、とる(株)日世。労働紛争に割り込み委託料つりあげ。市民患者が困る、関係ないと言われ。市民患者が困る、関係ないと言われ。市民患者が困る、関係ないと言われ。



市民患者が困る、関係ないと言われ。市民患者が困る、関係ないと言われ。市民患者が困る、関係ないと言われ。

全職員雇用、初めは真赤な嘘。解雇準備に「日世」社長、根拠を募集。相対交渉の場、市民が訴え、市長が責任を認め、スト破り。

市民患者が困る、関係ないと言われ。市民患者が困る、関係ないと言われ。市民患者が困る、関係ないと言われ。

こう。疲れているだろうが、こっちも首を切られるかどうかの瀬戸際だ。遠慮なんかしてられない」と安原は立ち上った。山本らが厚見と話しているうちに、明日のビラの一部を書き替えて「全員雇用(＝市との約束)は真赤な嘘」と直し終ったところであった。

山崎の自宅は市立病院から一キロほど離れた元荒川の堤防沿いにある。広い河川敷に畑が広がっている小さな村落の中に、洋館建の古いが趣きのある家で、教員をしていた父の代に建てられたものである。

寝静まっている家人に遠慮して安原らは二階の書斎に入った。山崎は真赤に充血した眼をしよぼつかせて、信じられないというように日世の求人広告を食い入るように見つめた。山崎 これが本当なら、日世は前からストを想

定して用意していたことになるね。

安原 それはおかしい。無期限ストというのは昨日のピラで始めて公にしたんだ。説明会のとつ
くの前から解雇準備していたとはどういう訳か。

山崎 理解できない。説明会で決裂したから、万一の用意をするというなら、それなりに分らな
いでもないが……。

山本 市長が日世に解雇しろと言ってるんじゃないか。

山崎 そんなことはない。全員雇用という大方針は助役や市長にも確認されている。

青木 それなら、日世が単独で解雇を考えていたことになる。全員雇用を前提として業者を入れ
るといのが市の方針なら、日世はその資格がないことになる。本日噂されている日世との契
約を延期して、何とか市長交渉が持てるようにしてほしい。

山崎 分った。これからすぐ助役と合って何とか話し合いができるようにもう一度申入れる。少
なくとも今日の契約はギリギリまで延ばす。だが、九日がタイムリミットだから、市長交渉が
実現しなくても契約せざるを得ないかも知れない。

山崎宅を出ると陽は完全に昇っていた。山崎の誠意は分る。だが、それがどれだけ市長を動か
せるか疑問であった。山崎は困惑と疲れでげっそりと頬を落ち込ませていた。「市長に山崎ほど
の思いやりがあればこんなことにならないよ」と青木が嘆いた。

この日、越谷市全戸に「市立病院を悪徳ビンハネ会社の巣にするな」というビラが各新聞の折込み広告として配布された。越谷市職が東京ワックス労組支援のために数十万の費用を投じて「島村市長は正々堂々と東京ワックス労働組合と話しあえ！」と呼びかけたものである。

「さあいよいよね」

「どうなるかしら、ちょっぴり心配ね」

午前八時半、電話交換手たちは緊張して守衛たちが扱っていた夜間電話から交換室にスイッチを切りかえた。

「はい、こちらは市立病院です。本日は委託労働組合のストライキのために電話はおつなぎ出来ません」

「病院は平常通り診療しておりますが、電話はおつなぎできません」

全面的な電話交換ストが始まったのだ。昨日まで組合では「緊急連絡」だけは受け入れる積りであった。だが、前夜半に判明した日世の「スト破り従業員募集」の新聞広告に驚き怒った交換手たちが、「首を切られるっていう時に黙ってはいられない」と自発的に全面ストをすることを決めたのだ。本当の救急患者は消防署や警察を通じて救急室に無線連絡される。病院の電話が通じなくても「人命に関わる」ようなことはあり得ない。診療をしていることは一々丁寧に説明してもらったことにはしたのだった。

「よかった。文句言われないわね」

「折込みビラがきているのよ。励ましてくれる人もいるわよ」

だが中には、市長の取巻き連といった市民から心ない苦情を受けることもあった。だが、あまりにもひどい労働条件や市長や会社が首切りを画策していることを説明すると黙ってしまいう者がほとんどであった。

病院当局はもとより市当局は大きなショックを受けたようである。病院と一切の連絡がとれなくなつたからである。このストの後で、病院中に本庁とのホットライン用に外線電話がわざわざ引かれたが、この当時は直通電話がなかったのである。市民から市役所に対して「病院スト？」の問い合わせが寄せられ、市長が激怒しているという話が伝わってきた。山崎や厚見からも「何とかならないか」という申入れが何度もあった。

共闘会議では「全面ストの情宣はできていない。たとえ三十分でもその効果は大きかった。これ以上やれば市民の批難もこちらにだけ向けられるだろう」と交換手たちを説得した。市民からの問い合わせに対して、必死になってストの理由を説明して休む間もなく緊張した応対を続けていた彼女たちはこらえ切れないように泣き出した。

「とにかく強行契約されたら断固として全面ストを打ち抜く。今から徹底的な情宣をやる。その時は覚悟して全員で頑張ろう」と共闘会議はようやく交換手たちを説き伏せることができ、九時

過ぎには事務所に対する内外線の取り次ぎだけは拒否し、一般外来・病棟への対応は正常化した。だが、業務開始三十分間のストの波紋は想像以上に大きく、日刊紙等も「午前中は電話交換業務が混乱した」と誤り伝えた程である。

「これからどうなるんだろうね。私たち本当に首になるんだろうか」と斉藤が涙の残った顔で不安気に呟いた。

「市長や日世がここを出て行けと言っても、私は絶対出ていかないからね」と馬場も化粧を直しながら言った。

「そしたら私達もつかまっちゃうのかしら」と誰かが心配そうに言った。

「皆にそんなことはさせないよ。強制排除されるなら、俺一人でもここへ立てこもって交換台は守りぬく」と、早朝から管理職とのトラブルを防ぐため、交換室の当直を続けていた支援の猿田彦がき然として言った。だが、さすがにその声は緊張でふるえていた。

その緊張に耐えかねた様に猿田彦は、七階の交換室の窓から外を見下した。前庭に大株の赤白のつつじが咲き誇っているのが見えた。小さなさつきは、つぼみこそふくらんでいたが、まだ咲く気配はなかった。

「一首浮かんだ」と猿田彦は叫んで、手許のメモ用紙に狂歌をひねりだした。

千金の花の季節の過ぎぬれば

さつき待ちつつ・自腹切るらん

猿田彦 千金の花（桜のこと）も散ってしまつて、今はつつじを見ながら、さつき咲く頃には逮捕されるのかと自腹切る覚悟を固めたよ——ってな意味。まあ、花の移ろう様を見ながら弾圧を覚悟したつていう花ずくしですよ。

交換手 さすが、風流人は余裕あるわね。

猿田彦 いや、この通り本当はガタガタ震えてるんですよ。

とわざと、ぶるぶる震えながら腹を横一文字にかき切るまねをして見せる。このこっけいな仕草に、交換手たちも思わず吹き出し、はりつめていた空気が急になごやかになった。

「あんまり無理しないで、最後まで頑張ろうよ」と馬場も元氣を取り戻し、交換手たちは普段の通りに仕事を続けた。

水上委員長らは朝一番から市役所の中を駆け回っていた。ピラ配りを終ると再び各職場を回つてスト協力を呼びかけた。庁舎内の記者クラブを訪ねて「スト宣言」と経過について精一杯話し

て来た。開会中の議會を訪れ、各党の議員控室を回って、市長の横暴さと苦しかった東京ワックス時代の実状を訴えて回った。自民党の議員たちも話だけは聞いてくれたが、「直営化」の申入れには「理事者（＝市長）の決めることだから」と返答を避ける者が多かった。

この日、朝一番で組合員が応募者を装って日世に問合せの電話を入れた。その結果、午前十時から市役所の向い側にある福祉会館で面接が行われることが分った。調べてみると、この「会場使用願ひ」は、病院の厚見課長から出ていることが分った。共闘会議は直ちに「募集説明会粉碎」を決定し、応募者向けのピラを急いで作って、福祉会館に組合員と共に向った。

十時前に、すでに何人もの応募者が集まり始めたが、会社側はまだ来ていない。水上を初め小母ちゃんたちが口々に応募者に紛争や日世について話をし、「スト破り要員として私たちに敵対しないしてほしい」と頼んだ。びっくりして、「こんな所へ勤められない」と帰る人もいたが、「会社からちゃんとした話を聞きたい。交通費だって貰わなくちゃ」としつかりした計算を示す交換手応募者もいた。清掃や守衛は年配者が多く、面倒な事は嫌だという風だったが、中年の交換手たちは「この近くで交換手なんてめったに募集しないから、喜んでやってきたのに」「スト破りなんて関係なく、雇ってもらえるんなら」とまで言う者もいた。

定刻を相当に過ぎてからようやく内海、早乙女らがライトバンに乗って現われた。組合員が周りをとり囲み、福祉会館の入口で即席の糾弾会を開いた。宣伝カーのスピーカーを市庁舎に向

け、市長室にまで聞こえるようにボリュームを一杯に上げての青空討論会である。

共闘 会社は昨日の説明会で最終態度を示すと言いながら、すでに募集広告を出していたのほどういう積りか。

会社 二日の説明会の後で、会社としては委託を受けようと決定して、万一やめる人が出ては困るということで手配した。

共闘 万一やめるとは何だ。誰もやめるとは言っていない。全員雇用か全員拒否しかありえないんだ。第一、雇用拒否は昨日の時点で初めて通告したもので、その前に募集を行うとは、最初から解雇しようとかかかってるんじゃないか。それに、会社が受けると言っても契約前で、日世に落ちるかどうか決まっていなない。

会社 みなさんが雇用を拒否するなら、会社としては当然人員を確保して業務を遂行する義務があるし、採用した人はこちらが責任を持つ。

追求の途中に厚見が来る。悪事露見に気付かず、他人事のように内海らの追求を眺めている。共闘 課長にお伺いするが、今日の面接会場はあなたの名前で借りられているそうじゃないか。スト破り要員を採用するための手助けをするとはどういうことか。

厚見 (たちまちたじろいで)スト破りの手助けなんてとんでもない。近くで面接会場がないというから、福祉会館を紹介したまでだ。

共闘 嘘つけ、会場は厚見課長の名前で借りられているんだ。

厚見 オラが借りたおぼえはない。ただ、会場が空いているかどうか聞いてやっただけだ。

共闘 それでは会社が勝手に名前をかたったのか。誰が手続きを行ったのだ。

会館側の話では確かに課長の名前で申込みがあったが本人かどうかは分らないという。いずれにせよ正式な使用願いは出ていない。結局、誰が申込んだか分らないままでは、福祉会館での面接はできないことになった。交通費等を後で払うからという名目で、会社は一人一人に連絡先を聞いて、この日の面接は中止となった。後に会社側では何人かの人間を採用したと言っているところから、後日に会社にも呼び集めたのであろう。

5 ワックス、七百万円で身売り提案

昼前によくやく日世を追い返し、あわただしく昼食をかき込んで午後から東京ワックスと第五回目の団体交渉にのぞむことになった。

前回交渉で観念したのか、日世の契約が目前に迫って責任のがれできると思っただけか、古郡副社

長、三浦専務ともこの日はすこぶる低姿勢であった。最初に従来からの要求について「解決金は五五〇万円、牛島ら二名の未払い賃金を本日支払いたい」旨の提案があった。

共闘 解決金はとも角、組合の同意なく解雇しないことを確約してもらいたい。

会社 市からは五月九日をもって契約解除という通知を受けている。その後は新会社（日世）に引き継ぎということで、全員新会社にお願ひすることにした。いったん当社は解雇ということになるので、解雇予告手当を全員に払いたい。どうか円満に新会社に移ってもらいたい。

共闘 市がどんな業者に委託しようが、ワックスが病院事業所の従業員として雇用した以上、雇用責任は法的には残る。現実にはワックスでは市立病院以外に三十人の従業員を病院以外で雇用できるのか。

会社 この近辺ではとても無理です。清掃の少くらいなら何とかなるが……。

共闘 それ見ろ。やはり解雇するしかないのだろう。病院勤務を前提にして採用し、委託を辞退したのは会社の一方的な都合だから、理由は労組結成しかない。そんな不当労働行為による解雇は法律的に争っても通らない。第一、何年も裁判を続ければ会社の社会的ダメージは大きくなるばかりだ。

会社 ですから、解決金を出せるだけ出します。一時払いでは無理だが、半年くらいの期限があれば、私たちの役員手当をすべて返上して七〇〇万円までなら、何としてでも出します。それ

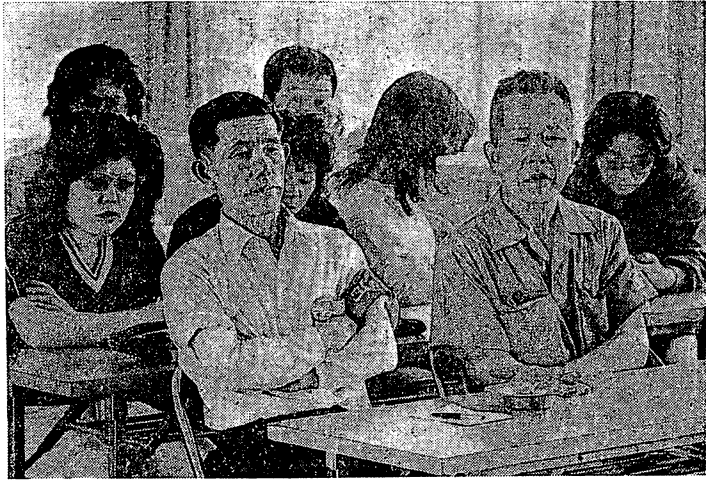
でどうか日世に移ってもらいたい。

交渉は難所にさしかかった。金銭的には七〇〇万が限度かも知れない。解雇予告手当二〇〇万、解雇無効未払い賃金もあわせると一千万円近い出費である。管理費十数パーセントといわれる業界では二年間の会社の管理費に匹敵する金額である。解決金についてはこの程度で良いのではないか。「会社も可哀そうだからね」と小母ちゃんたちはつい情にもろい面を見せた。だが、日世の強行就労が明白になったいま、東京ワックスから解雇され、「雇用なき就労」を行う訳にはいかない。だが、いくら話をしてでも古郡も三浦も、「お願いですから日世に移って下さい」と頭を下るばかりだ。おそらく当局からこの点は強くダメ押しされているのであろう。このまま物別れになれば、東京ワックスは解雇通知を出してくるだろう。いずれにせよ、市長が望む「雇用なき不法就労」は避けられそうもなかった。

何度かの休憩の間に、組合の全体集会が持たれた。その席上で、現場責任者の樺沢がこの間の沈黙を破って猛烈な勢いで喋り出した。

樺沢 これ以上いくら反対しても、市は日世と契約してしまうだろう。ワックスも九日までしか身分の保障ができないといってるのだからこれ以上は無理だ。日世と契約した方がいいんじゃないか。

樺沢は組合員をじろっと睨みながら、確固として喋り続けた。当初組合結成に反対した樺沢



水上委員長（真中）と交換手

は、第三回団交で会社側が非を認め、当局も組合に雇用を保障することが明白になってから組合加入を申出てきた。しかし、その後めたさがあってか、団交や組合会議でも沈黙を守り続けてきたのである。だが、事態が再び組合の窮地に至った今、組合員の一部にある動揺を見すかしたように「現場責任者」としての威勢をもって組合に揺さぶりをかけてきたのである。事実、何人かの組合員が安堵したような眼付きで樺沢を見上げ始めた。

この時、安原が猛然と大声をあげて樺沢を罵倒した。

「そんなに日世に行きたかったら、あんた一人みんなを裏切って行けばいい。今まで現場責任者として会社に何一つ言えなかったお前が、みんなを誘って、また委託地獄に引き戻そうとし

てもそうはいくか。お前なんかは今さら寝返っても組合は痛くもかゆくもない。だが、お前は小母ちゃんたちを裏切った痛みで一生苦しみ続けるんだ。そうなくても誰もお前を助けてくれないぞ」。会社側に対しては痛烈な罵倒を浴びせることはあっても、安原は今まで組合員の誰にも大声をあげることはなかった。それだけに、この樺沢に対する激しい怒りは、組合員全体が叱られているようなすさまじいものであった。

「あの時は本当に恐しかった。でも、私らあんまり不安で気持ちが悪くぐらついていたのが、あれで一遍に吹き飛んでしまったよ」とある清掃員は回顧している。

樺沢は青ざめてぶるぶる震え出した。水上や笠原が「責任者として無責任だ」と樺沢を批判した。樺沢は「分りました。私の言いすぎでした」と言って再び沈黙した。どんな事態になっても日世との契約には応じないということが確認された。

「どうする。このまま徹夜交渉をやってもワックスは解雇を撤回しないぞ」

「ワックスとの金銭的な問題については、組合員も七〇〇万で了解したのだから問題はない。資材についてもすべて組合に譲渡するということで、組合が業務を続ける上で何の支障もない。賃上げ要求にしても、相当の委託料引き上げが日世との間で話されているのだから折り合いがつかない訳はない。だとすれば、ワックスとしても現在の時点ではどうしても契約を辞退しななければならないということはないんじゃないか」

「それでは、ワックスに再契約させるというのか」

「当面の時間稼ぎにもなるし、最悪の場合でも日世を相手に市長の強硬方針と対決するよりやりやすいのではないか」。混乱した中から何とか最悪事態だけは避けたいという雰囲気が共闘会議の中から出てきた。

七時間に及ぶ交渉の合い間に、共闘会議は組合員に対して「①日世との契約に応じ、屈辱的な敗北の中で管理された労働を選ぶか、②あくまで直営化を要求し、自主就労で職場管理を続けて市長と対決するか」の二者択一の状況をくり返し説明した。どれにせよとは言わなくとも、東京ワックスのひどい労働条件、日世のあくどい暴力的な体質を自分の目で見、耳で聞いた以上、組合員の判断は後者にあった。だが、何の運動経験もなく、社会的経験も乏しい者が多い中で、「会社に雇われなくても仕事ができる」状態を想像しろというのも無理であったかも知れない。できれば、最悪の事態だけは避けたいという気持を共闘会議の誰もがもっていた。

だからこそ、いったん契約辞退をして今日の混乱をつくり出した東京ワックスに再契約させようという矛盾した提案が受け入れられた。交渉を打ち切って、市職労三役が東京ワックスを連れて助役との交渉に出かけていった。この交渉の結果は、この夜のうちに執行委員会を開いて再度協議することになり、いったん全員が家に帰ることになった。

「今さらワックスにやらせるなんておかしいんじゃない」とヒロキを初め、何人かの埼委労の若



病院の看護婦も支援に！

手組合員から異議の声があがった。これに対し青木らは、

「少なくとも日世よりは鬪いやすい。今日、市職あてに日世で働いていたという人から連絡があった。内海という男は業者の談合の席で、日本刀をちらつかせて談合をぶち壊したという豪の者だ。どんな無茶をやるか分らない。」

※ こういう通報があったのは事実である。だが後日、会社側のA氏は「それはうちがある事業所と委託契約した時、その労働組合が押しかけてきて、社長が応接室に飾ってあった日本刀を御身用に握りしめてガタガタ震えていたという話が、誤り伝わったんじゃないか」と「真相」を明らかにしている。

ワックスなら、どう逆立ちしたって別の人間を送りこんでスト破りをするような力はない。少なくとも、最悪事態回避で助役や事務局長が

市長を説得して時間稼ぎをする余地があるのではないか」と希望的観測を述べた。

だが、この希望的観測はあつという間に崩れた。佐々木委員長らが戻ってきて、「助役は何を言ってるんだという態度だ。古郡はワックスの辞退が混乱を招いたといつて一喝されてしゅんとしていたよ。市側の感情からいえばワックスがすべて悪いということになるんだろう。こちらから助役を説得する余地はないよ」ということであつた。

「東京ワックスも、こうなつたらうちでは責任をとれない。日世へ行ってくれの一点張りだ。一人一人に話して納得してもらうなどと言いだして様子がおかしいので、市職の組合員にあとをつけさせたが、平和橋のあたりでまかれてしまった。どこへ行ったか分らないが、日光街道へは出ていない以上、市内のどこかを回っているらしい」。東京ワックスと日世は一体となつて従業員の切りくずしを始めたらしい。

「こうなれば、なしくずしに脱落者が出る前に日世との契約に応じて、その中で組合の団結を強めて会社側の管理支配体制を覆すしかないんじゃないか」という意見が、一部の市職役員から出てきた。

「冗談じゃない。今日の組合全体会議で樺沢が身分移管を提案して、皆から裏切り者扱いされた。そんなことを我々の側から言える訳はない」と埒委労（＝当時）の組合員が一斉に反発した。

「しかしこのまま行けば、全員がクビになるのは必至じゃないか。そしたら誰が小母ちゃんたち

の生活を保障するんだ。一カ月や二カ月なら市職から給料を立て替えることができても、裁判闘争で何年もかかれば、とてもそれだけの負担はできない」

「裁判闘争でちんたら解雇撤回をやるなんて考えていない。会社側のスト破りについては、病院内の管理職がそれぞれの職場で会社側に協力しなければできないことではない。問題は市長が警察導入を要請して強制排除に出てくることだろう。これについても段階的、柔軟な実力闘争で、とにかく会社側の就労の実効をなくせば、誰も清掃できないことになって、病院中ゴミだらけになって混乱する」

「とにかく、組合員は今必至になって闘っているんだ。仮に万事窮すということになっても、明日の夜ギリギリまで待ってもらいたい。小母ちゃんたちが最後まで死力を尽して闘って始めて、敗北から立ち上がる力も知恵も湧いてくる。それを我々が先走って、これ以上は闘えないだろうから止めろなんていうのは、小母さんたちを見くびることになるんじゃないか」

共闘会議の中で苦しい討議が続いた。解雇や強制排除は避けたい。かと言って、ここであっさり日世を認めてしまえば、会社・市当局から組合潰しの攻撃や合理化が押しつけて来られるのは、目に見えていた。

夜十時近くになって渡辺と笠原がやって来て意外なことを言い出した。「さっき、Kさんのところへワックスの専務らが来て、日世との雇用契約を結ぶように説得した」というのである。「K

さんは、この近くに住んでいるから助役との交渉の後で寄ったのだろう。他の人のところにも行く恐れがある」と山本が懸念した。

円満に日世への移籍が行われないと、より一層市当局のワックスに対する責任追求は厳しくなるだろう。窮地に立ったワックスが日世に代って従業員の説得に乗り出したものらしい。そういえば、今日の樺沢の態度もワックスか日世からの要請によって移籍を提案したとも受けとれる。

「そういえばKさんは、樺沢が面接して採用した人だからね。樺沢も切り崩しに動いてるかも知れないわ」と渡辺も言った。それでなくとも、連日の慣れない行動による疲れと先行き不安から、小母さん達の間に内面の動揺がない方が不思議だ。

「それじゃ、今から皆のとこへ回って、樺沢や会社が来たかどうか確かめてみましょう」と彼女達が提案した。

「来てなくても、みんなを励まして回るだけでもいいんじゃない」と笠原らも賛成した。遅くまで残っていた交換手たちも参加して、三通りのオルグ団が結成され、それぞれに共闘会議のメンバーが車を運転して添きそっていくことになった。

栗原や中台に連絡をとったところ、「会社の人間は来てませんが、樺沢のところにいくんなら私も行く」ということであった。樺沢糾弾班は病院の山本らがつき添って行った。樺沢の自宅には灯が着いてはいたが、中台らが声を掛けると灯は消え、呼べども叩けども何の応答もない。山本

らは一しきり大声で「樺沢さん、皆を裏切らずにちゃんと仕事に来て下さいよ」と呼びかけて樺沢宅を後にして、春日部の組合員を訪ねて激励した。

草加に住んでいる三人の組合員の家には渡辺と交換手の馬場らが回った。伊藤あきは「私は大丈夫だよ。会社が来たって帰ってもらおうよ」と気丈に言った。だが、牛島はつ子は「病気で寝たきりのおじいさんが心配しないように、団交も早く返してもらって済まないね。おじいさんだけが気がかりだけど、私は大丈夫よ」と力なく笑った。

結局、会社が訪問したのはKさんだけであることが分かった。市役所帰りにちょっと寄ってみたいというだけだったのだろう。だが、この日権沢糾弾と組合員オルグを執行委員たちが自発的に行ったことの意義は極めて大きい。組合結成後わずか一ヵ月にして、執行委員や組合員の考え方や行動力は外から見ている者には分らない程たくましく成長していた。「これなら、強制排除されても頑張れるかも知れないな」と青木や安原は、帰ってきた執行委員の報告を頼もしく聞いた。佐々木や山本らも、組合員がここまで頑張れると思っていなかったろう。「こうなったら、小母ちゃんたちの生活はどんなことがあっても市職で支えていくよ」と、佐々木委員長も腹をくくったように言った。

6 病院の電話が通じない

東京ワックス労組のストは二日目を迎えた。この日、全国紙埼玉版、埼玉新聞等に「委託労組のスト」が大々的に報じられた。

共闘会議はこの日、契約阻止を掲げて最大動員をかけ、早朝から契約担当者の厚見課長、山崎事務局長を徹底マーク。さらに、話し合いを拒否し続ける島村市長宅に交渉申入れと抗議を行うべく宣伝車を差し向けた。

午前七時、水上と中台を大袋駅で出迎え、駅頭で市長糾弾をアピールして市長宅へ向かう。島村市長の自宅は大袋の自作農家の集落の中でも一際目立つ門構えと広大な敷地によって、一目でそれと分るものであった。

安原と水上が開け放たれた門内に申入れに入り数十メートル進んで母屋の裏玄関に回って案内を乞うた。市長夫人と覚しき上品めいた中年婦人が出てきて「島村は外出しました」と悪びれる風もなく平然と答える。居留守かとも思うが、筋の通った返事に退きさがらざる得ない。だが、

門内には公用車らしき黒塗りの車と自家用車が停められたままである。

「こりや絶対中にいるよ。一発かましていこう」と安原は言つて、スピーカーのボリュームを一
杯に上げ「島村市長は逃げ隠れせず堂々と出てきて委託労組と話し合え。昔の地主よろしくふん
ぞり返つて貧しい人々をいじめておいて俺に関係ないでは済まないぞ。年寄りをバカ野郎呼ばわ
りすることが市長様のやることか」とぶち上げた。

「安原さん、もう行こうよ」と水上が警察でも来やしないかと心配して促した。宣伝カーは市長
宅を数分で切り上げ、周辺を何度か回つて、元大袋村村長の長男の非道ぶりを宣伝して回つた。

「僕は声が枯れたから大和さんやつて下さいよ」と安原は交換手の大和にバトンタッチした。交
換台で物馴れた応答をしている大和も宣伝カーは初めてと見えて、ギョチない口調で、ストライ
キへの支援と、市長交渉への協力を市民に訴えた。しばらく市内を回っているうちに、原稿がな
くても、自分の言いたいことを言えるようになったのは、さすが交換手というところだ。

昨日の説得が利いたのか、組合員の多くは朝から元気な姿を見せた。だが、権沢は姿を見せな
い。水上らが自宅に問い合わせたところ、「えらい人に相談に行っている」という家人の返事で
あつた。恐らく、会社側に寝返つたのであろう。

この日、新聞報道によってほとんどの市民が病院の委託ストを知つた。こうなれば大きな混乱
はないだろうという判断で、午前八時半から十一時頃まで救急連絡も含む一切の交換業務をス

トップした。救急連絡と言っても、いわゆる一般外来の救急患者であり、救急車の出勤を必要とする本当の救急連絡は、警察・消防署への通報によって救急車に無線連絡されるものであり、「救急患者」の連絡が取れないということではないのである。だが、一日千数百本もの外線が入る病院の代表電話の交換ストップの影響は前日の比ではなく、市当局には市民からの問い合わせ（中にはストへの苦情も）が殺倒したものと思われる。ある市議員が知合いの入院患者に連絡をとろうとして断られ、「俺は市議員だぞ、ストなんか関係ない。どうしてつながないんだ」とわめき散らしたという。彼らが市民の代表でも何でもなく特権意識の囚とらになっていることを物語る小話である。

ついにたまりかねたのか、藤倉助役が病院へやって来て組合と話をするという。助役は副院長室に入って代表としか会わないと主張したが、「これだけ心配している組合員と話さないとどういうことか」という追及に、控室のドアも開放して二つの小さな続き部屋一杯に組合員と共闘会議の労働者が埋めつくして話合いが開かれた。

共闘 この事態の混乱を市はどう收拾する積りか。

助役 とにかく、ストライキはやめてもらいたい。病院の診療活動に支障をきたすようなストは困る。

共闘 助役は前回の交渉で、医療に関係のない補助的業務だから委託に出した。従ってそこでの労使紛争は市には関係ないと言ったではないか。にもかかわらず、委託ストで診療に差しつかえる。ストは止めるというのは、前言はまったくの嘘っ八ということになるではないか。

助役 直接の診療業務ではないが、交換ストは重大な支障を来たす。補助業務でも場合によれば基本業務に支障をきたすことがあると訂正する。それでも委託は今一つの理由である行政合理化のため不可欠だ。委託業者に任せた方が市で直接雇用するより安上がりになるのは事実だ。

共闘 そのような安上がり行政によって、労基法違反や最賃法違反の不当労働行為が行われていることに、どう責任をとるのか。

助役 今までの事態について、基本的には業者の問題だが、委託料が低すぎたことが労働条件の悪化を招いた点については是正したい。

共闘 委託料さえ上げれば不当行為がなくなるというのは間違っている。現に日世は都水道局から不当なピンハネで労基法違反を犯したり、死亡者をごま化して委託料の欺し取りをするなど、業務でも札つきの業者であることを知っているか。こういう業者に委託すれば必ず問題は起きるし、労使紛争も決してなくなりはない。

助役 日世は責任をもって業務に支障は来たさえないと言っている以上やらせて見るしかない。

共闘 スト破りをやり、従業員を解雇しようとしている会社が、円滑に業務遂行できると思っ



必死に応答する交換手

いるのか。市が勝手に日世と契約しても労組は雇用契約には応じられない。あくまで東京ワックス従業員として解雇に依らず職場の自主管理、ストライキを強行する。

助役 そうなれば、市としては業務に支障をきたすストライキを認める訳にはいかない。

共闘 それでは、かつての病棟移転闘争のように警察を導入してスト中の労働者を力づくで排除するとか。

助役 本意ではないが、それも止むを得ない。

共闘 事務局長はどう考えるのか。

山崎 病院の管理責任者としては、どんなことがあってもそう

いう事態だけは避けたい。

共闘 それではもう一度市長と膝詰め談判して強制排除はやめて、話し合いで解決するよう努力してほしい。

助役 努力はするが、市の方針としては今日中に日世と契約は交す。良い会社か悪い会社かやらせてみなければ分からないではないか。

話せば話す程、「物分り良さそう」な顔をしている藤倉助役自身にも根深い委託差別が染みついていることが分って、組合

員たちの間に助役に対する幻想も薄れてきたようだ。市職三役が、さらに詰めよって、「強制排除は避ける」「来年度の委託制度について見直す」「今までの不法行為について一応の謝罪を表明する」ことで何とか市長を説得するよう強く要請。助役も再度の努力を約すかわりに、交換ストだけでも解くよう要請した。

「最低の誠意と言っても、市長は謝罪したり元請け責任を認めようとしないだらう。それでもここは助役を信頼した形で一步譲歩した方が、市民の理解は得られる」という判断で、労組は午前十一時「緊急・保安連絡スト解除」ということで、外来、病棟への外線からの取り次ぎを正常化した。しかし、内部からの外線取り次ぎと事務系の一切の取り次ぎだけは拒否し続けた。市民から見れば一応市立病院への電話が再開されたことになるが、内部の職員から見ればストは依然として続いており、外線にかけるには公衆電話を使うしかなかったが、市職組合員の多くは不便をしのいで協力してくれた。

「事務当局が契約当事者」という慣例に基づいて、その日の午後は、組合員や共闘会議メンバーが厚見課長の席の囲りでたむろし、山崎局長の行動にも監視をおこたらなかったが、二人とも夕方過ぎるまで病院の外へ出ることはなかった。

厚見は「オラなんか監視したって契約は阻止できんべ」とニヤニヤ笑いながら、まとわりつく警備員達と雑談に余念がなかった。

この日、新聞報道を見て心配して多くの人々が駆けつけてくれた。地元社会党の高橋議員、元県評オルグの金井重子、地区労のオルグや越谷教習所争議団の人々であった。

特に金井は、長年にわたる婦人運動、組合運動の経験を交えながら、小母ちゃんたちに親しみのある激励の言葉をかけた。「私はね、女性が、とくに皆さんのような年配の方々が労働組合をつくって自分たちの生活と権利を守ろうと頑張っているのはとても素晴らしいことだと思うの。今、労働者には政府や大企業からとても厳しい攻撃が来ている時に、これだけ年とった人も頑張っているのだということ、多くの未組織労働者が知ってくれたことは大きな意味がある。皆さんもとても大変だと思うけど、最後まで頑張ってほしい」

金井は同時に「越谷の委託闘争が、県中央にも大きな反響を呼び起こしている。それに伴って、警察の動きも活発化している」と注意を与えてくれた。

助役との交渉の後で、このような情勢の変化に対応して支援労働者の中から、組合員に対して次のような提起が突然あった。

「市長はも早一切の話し合いを拒否し、ストライキを実力で排除しようとしている。東京ワックスとの契約が切れた以上、日世との雇用に応じなければ不法就労ということで排除されてしまう。

そうなれば、長期の裁判闘争しかなく、東京ワックスとの契約が打ち切られる以上地位保全の訴えも通る可能性がうすい。

この際はみんなが団結して日世に移って会社の管理強化と闘い、団結を固めて長期に直営化をめざすべきではないか」という趣旨であった。

たしかに、真向からの暴力的対決は避けねばならない。問題は、そのギリギリまでどのような闘い、労働者の一人一人がどういう思いを獲得するかである。それを先走って、あれこれの收拾を上部から提起するのは間違いである。まして、共闘会議としてはあらゆる重大方針については、全員討議にかけて当該労組に提案してきた。この手順を無視して、いきなり大衆的動揺を与えるような発言をすることは、今までの運動の基盤を損う恐れさえあった。

青木や安原は、だが性急に反論はしなかった。組合員の多くが当惑気な表情で彼らの意見を聞いていたからである。この時点では、支援者が心配するような動揺は組合員の中には起きていなかったのだ。

7 轢き逃げで深夜の会社追求

樺沢が仲間を裏切ったことが分ったのは、その日の夕刻である。この日の朝、水上が樺沢の自

宅に電話した時「偉い人に相談しに朝早く出かけた」という家人の返事であった。夕方になって水上が再び電話したところ樺沢が図々しく出て来た。

水上 樺沢さん、今朝はどこへ行ってたんですか。こんな時だから一人でも休まれると困るんですよ。

樺沢 そんなこと言う必要はない。ワシも生活がかかっているんだ。給料も貰えないような所へ行くっても仕方ないよ。

水上 日世へ行かないというのは組合の決定だし、給料は組合でちゃんと払うんだから来て下さいよ。

樺沢 ワシはもう組合をやめたんだから、そんなこと言われる筋合いはねえんだよ。

安原 (電話を代わる) 樺沢さん、ワックスが解雇すると言っても組合は認めない。市立病院がある限り東京ワックス労働組合は永遠に続くんだ。そんなこと言っているとあんたの働くところはなくなるよ。

樺沢は捨てゼリフを吐いて電話を切った。裏切りに対する怒りの声が次々に起こった。組合では樺沢を除名し、病院では働かせないことを決議した。裏切り者に対する憎しみが団結を固め、闘いのエネルギーとなることがある。故意に敵をつくることは良くないが、この時の組合員の怒りは日頃から自分の仕事と生活のことしか考えていない会社の下級職に対する一人一人の腹の底

からの怒りであった。

その夜の全体会議は怒りと不安がないまぜになった重苦しい雰囲気が始まった。市職の青年婦人部や看護婦、支援労働者が続々と詰めかけて来た。

あれだけの反対がありながら島村市長は契約を強行したのだ。それもどうやら深堀秘書課長が内海の車に同乗してどこかへ出かけたことが目撃されている。事務当局を立ち合わせず、秘かに庁舎外で内密に契約を結んだらしい。「ストをやるような組合員はおいておけない」と市長が語ったことがある新聞記者から伝えられた。ストライキを続行した場合、直ちに警察導入、強制排除の拳に出でくるとは明らかであった。

「日世という会社は信用できない。何をされるかわからないから雇われたくない」

「毎年こんな騒ぎになるなら不安で仕方ない。何とか市に責任をもってもらいたい。今すぐ無理でも、せめて市長から一言でも安心できることを言ってもらいたい」

組合員の意見はこのようなものであった。組合ができた途端に会社が逃げだし、この四〇日余、死ぬような思いで頑張ってきた。「はい今日から新しい会社の従業員ですよ」と言われても簡単に納得できない——というのが多くの組合員の率直な心情であった。

これに対して共闘会議の側から様々な意見が出された。焦点は「雇用契約に応せず、職場の自主管理（雇用なき就労）を続けて行政責任を明確にさせる」というところであった。

「だが、強制排除されたらどうするのか」

「長期の解雇撤回、就労闘争にどこまで耐えられるか」

「財政的見通しはどうか。雇用保険は一年しかもたない。それ以上のカンパ活動、集団アルバイトの可能性はあるのか」

「不当解雇の法廷闘争の見通しは、原職の地位保全の仮処分は認められるか否か」

東京ワックス労働組合はもち論のこと、越谷市職労や埼委労（＝当時）、埼学労、埼教労などの支援労働者にとっても、法律上の知識や民間労働組争議団の伝聞はあっても、自分自身にとっては未知のものであった。誰もが確信ない。「だが、ここで安易に新会社に応じれば、島村市長の姿勢を永久に変えることはできない。また、それ以上に新たな合理化・組合つぶしの攻撃がかけられてくるのは陽の目を見るより明らかだ。先の見通しはなくても、頑張るだけ頑張ってみよう」ということで、ようやく労組と共闘会議の意見がまとまった。

この結論をもとに、井上弁護士が裁判闘争の見通しについて語った。

「地位保全の仮処分はすぐ出るかどうか分らない。だが、少なくとも市に対しては裁判の結論が出るまでは就労を認めよと主張することはできる。会社が変わったからといって、今働いている皆さんは市立病院の仕事ということで採用されたのだし、実際に他所で仕事をするといいてもできない。事務当局が全員雇用を確約しているという事情もある。難しいかも分らないが、仲間の弁

護士の応援を求めて全力で法廷闘争をしたい。皆さんが一人もくじけずに頑張って就労し続ければ、裁判所も既成事実として認めざるを得ないのではないか。一人の首切りも許さぬため私も全力をあげたい。ここで皆さんが頑張りがぬくことが、多くの下積みの労働者や年配の労働者に大きな勇気を与える。これはもう一種の世直しという気持で頑張ってもらいたい」

井上の激励に小母あちゃん達は目がしらを曇らせながらうなずいていた。市職の佐々木委員長も、市職が保障して労働金庫から争議資金を借り入れるメドが立ったと報告した。

会議が終って、組合員たちは明日からの就労闘争に備えて早目に帰ることになった。春のおぼろ月が、傘をかぶって今にも泣き出しそうな空模様である。

「昨日、支援の人から日世に入れと言われた時は情なくて泣いちゃったよ」と交換手たちが、ようやくふっ切れたような表情で話していた。

「まあ井上さんがあそこまで激励してくれたんだから、共闘会議もまとまるんじゃないか」と藤本が安心したように髪をひねった。「埼委労の留守番電話阻止闘争も、三役交渉とかで県とナアナアで話がつきそうだし、これで明日からの自主就労に全力を挙げて取り組めるぞ」

「安心するのは早いんじゃない。こじれないうちに收拾しようという動きはまた出てくるよ」とヒロキが気がかりそうに呟いた。

会議が終つてしばらくすると、笠原から電話があった。案の定、東京ワックスから内容証明付きで「解雇通知」が送られてきたというのである。水上に連絡をとって「全員に確認して、受けとった人は明日持って来るように、今日来てない人は明日以降は受け取り拒否するように」全組合員に確認を取ってもらうことにした。

「社長が来たぞ。今、事務室で局長と話している」と山本が丁度そこへ飛び込んできた。

「宣戦布告して叩き出してやろう」と、その場にいた者は総立ちになって事務室へ向った。帰りかけていた内海は共闘会議のメンバーが入ってきたのを見て傲然と胸を張った。

「どうだ」と言わんばかりの面構えであった。

「何しにきたんだ。局長や課長もいない所で一体誰と契約したんだ」と山本が詰め寄った。

「私は市と契約をしたんで、病院とする訳じゃない。だから局長にご報告に来てるんですよ」と早乙女が相変らずとぼけた返事をした。

「お前らが勝手に契約したって、労働者が働かなければ



決戦近しで厳しい表情

契約不履行になるんだよ」

「皆さんが働いてくれなくても会社はちゃんと仕事をしますよ。そのために人を雇ってある。第一東京ワックスから解雇された人が働くのはおかしいですよ」

「どうしてそんなこと知ってるんだ。ワックスとぐるになつて全員解雇しようというのか。局長どうなんだ」

山崎は苦痛に顔を歪めている。「全員雇用」を約束しておいて、東京ワックス労組員が解雇されれば市の責任が果せないことになる。年配者たちの行先を思う心情がありありと表情に現われていた。

「そこなんだ。何とか日世と雇用契約を結んでもらえないだろうか。今後のことは何とかもう一度市長に頼んでみるから、今年だけでも日世で働いてくれよ」

「局長はそう言うが、労働協約も結ばれていない。労働条件も就業規則も知らされていないのに誰が安心して働けるんですか」と市職の塩田副委員長がやりわりと山崎を責めたてた。

「だから、それは明日にでも話し合ってくれよ。会社だって全員雇用すると言ってるんだし」

「もち論ですよ。私は全員雇用するって言ってるのに、あんたらが雇用させないんでしょう。従業員はうちで働きたがってるんじゃないんですか、本当は」と早乙女。

「そんなこと言ってるのは樺沢一人だ。樺沢が今日、本社まで行ったのは分ってた。今まで威

張りちらしていた現場責任者に従業員の切り崩しをやらせようだったってそうはいかんよ。組合では権沢を除名した。奴が明日でも病院にのこのこ顔を出したら、組合員に吊し上げにされてしま
うんだ」

「とにかく、明日からうちで仕事をさせてもらうんですから今日は失礼しますよ」と早乙女は内海をうながし、局長に頭を下げて事務室を出ようとした。

「何を言ってるんだ。そんなことさせないぞ」

「お前らが暴力団を雇おうが、誰に頼もうが、東京ワックス以外の誰もここで仕事はできないんだぞ」

労働者たちは早乙女と内海をとりかこんで口々に追求した。二人とも口を閉じて足早に救急玄関から駐車場へ向かい、走り込むようにして待たせていた車に飛び乗った。

「おい、その車で深堀とどこへ行ったんだ」

「こそこそどこへ行って契約したんだ。待てよ、はっきり答えろよ」と何人かの労働者が車の回りを囲んだ。

「おい早くやれ、早く」

内海が慌てたように運転手に声を掛けた。二、三の者が車の前へ立った。その時、車が急にバツクし、後にいた山本を躓きそうになった。山本はあわてて飛びのいたが、バンパーにしたたか

に足を打たれてひっくり返った。

「何をするんだ。轢き殺す気か」

「人を轢いてこのまま帰ろうってのか」

後から来た者も血相を変えて車の回りを取りかこんだ。

早乙女が観念したように、ドアのロックを開けて外へ出て社長を促した。「ここじゃまずい」と言っているようだ。病棟のあちこちの窓が開いて「何ごとならん」と患者たちが顔をのぞかせていた。

「運転手もつれて来い。ちゃんと謝らせるんだ」

「山本さん、すぐ救急へ行って治療してもらった方がいいわよ」と組合員が山本を促して救急室へ向かった。

病院のガランとしたロビーで謝罪を要求する共闘会議と会社側の奇妙な団交が開かれた。

騒ぎを聞きつけて山崎局長が事務室から下りてきた。早乙女がしきりに弁明している。山本が救急室から戻ってきた。膝頭を強く打撲しているという。早乙女がひたすら陳謝して「治療費をもちますから」などと必死でもみ消しに努めている。内海はふてくされたように、やたらにタバコを喫っている。

結局、運転手に「始末書」を詳しく書かせて、「山本君の傷の様子次第で処置を決める」とい

うことで、とりあえず一件落着させた。

この一部始終を見ていた山崎は「自分の責任で明日は強制排除しないよう市長や助役に頼んでみる」と言いだした。「明日一日で何とか解決のメドをつけてほしい」と苦悩に満ちた表情であった。

この事件は、いかに会社側が後めたい思いで契約を交わしたか。運転手をあごで使い、自分の目的のためには周りの様子すら氣違ふことのない内海らの自己本位的な性格が伺えた。それと共に、執こく真相を糾明しようとする共闘会議の団結と力を会社側にまざまざ見せたという点で、契約成立で勝ち誇った会社側の出鼻をくじく鋭い打撃となったのである。

8 自主就労・幻の(秘)大作戦

五月十日、ついに「雇用なき就労」の第一日目が始まった。前夜から泊り込んだ数名の労働者たちと、朝一番で駆けつけてきた労働者が病院の中へ大きな「自主就労宣言」を張りだした。

八時前には組合員たちも出勤してきた。今日から「雇われるべき会社」はない。自分のために

自分自身で働く「自主就労」である。会社の責任者もいなければ、業務命令もない「自主管理」である。だが、小母ちゃんたちにはこの「画期的な意義」より、不安の方が強いのであろう。どの顔も緊張したように表情が固かった。

「駅前に日世の車がとまっています、川前らがたむろしてました」と電車通勤の者が報告した。彼らもまた「実力就労」しようというのか。結局、この日は樺沢以外に二、三の者が「家庭の都合」や「具合が悪い」という理由で休んだ。たまたまの不都合だとは思いますが、ここへ来て休む者が出てきたことは、当該組合員より支援の労働者に不安を与えたようであった。だが、休む者が出ようと仕事と闘いは続けるしかない。

支援の労働者も交え、駐車場、玄関先から重点的に仕事を始め、来たるべき日世の「就労部隊」の警戒を続けた。

八時すぎ、玄関先に一台のライトバンが現われる。車体には「日世」と大きな文字。中には数名の人間が乗っている。急を聞いて何人かの支援労働者が駆けつけた。車の前にまわりをとり囲んで手を広げる。ライトバンは急停車して、あわててバックで玄関前のロータリーを逆に回って逃げだした。

「何てことはない。就業しましたというポーズづくりだ。もう今日はこれ以上こないだろう」と皆で大笑いした。

の会社に雇われてるんだ、言ってみろ」

「私たちはまだ東京ワックスの従業員ですよ。市が新会社と契約したからって、私たちが認めなきゃならないことないでしょう」

「何言ってるんだ。そんなことは許されない。今すぐ、そこから出て行け」。言いたいことを言っ、この怪電話は切れた。

「あれっ、あの声はひょっとして市長だったんじゃないの。口惜しい、文句言ってやったのに、気がつかなかったわ」と電話を切った後でこの交換手が叫んだ。

この日取り次いだ千数百件の外線電話のうち、故意に中傷したり罵声を浴びせかけてきたのはこの一本だけである。この時のやりとりを深堀秘書課長が録音テープで聞いていたのが確認されている。越谷市長の品性を見事に表現しているこのテープの公開を望むものである。

多くの電話は普段と変らなかつたが、「ストですか」とか「自主就労って何ですか」という問い返しは少なからずあつた。この一つ一つに交換手たちは自分達がなぜ自主就労しているか懸命に語つた。通常でも喋りっぱなしの交換業務はどこでも時間制で交代になっている。それが一休みもなしに喋り続けるのである。この日の終りには四人とも声もかすれ、汗まみれになつてぐったりと疲れ果てた。だが、精一杯やったという満足感があつた。

「こんな必死でやったなんて、初めて交換台に座つた時以来よ」

午後から「強制排除」に対する対策が話し合われた。警察が入れば「清掃員控室」から当然追い出されるであろう。万一の事態に備えて、組合員は清掃機材や材料を控室から院内の組合事務所へ移した。ここを拠点にして長期の「自主就労」を柔軟に行うためである。

仮に日世が従業員の頭数を揃えてきても、病院内部の清掃をその日から滞りなく行うことは不可能である。エネルギー室や営繕・洗濯場などの別棟、外来食堂や看護宿舎などが広大な敷地に広がっている。どこをどういう手順で仕事をしていくか、一朝一夕に分るものではない。病棟にしても、女性患者が多いため男の清掃員は病室の中へは入れない。看護婦や入院患者たちから白い眼で見られて、日世の従業員が仕事をするができるだろうか。婦長や職制に教わらねば、どこをどう掃除してよいか分らない。だが、当局側の管理職が委託会社の従業員を「指揮監督」することはできない、それは違法な「労働者供給事業Ⅱ人夫出し」と判定されるからである。

日世の従業員が病院内に入っても実際上の業務を行うことができない。院内の清掃の大部分は、市職組合員や患者の協力によって今迄通り東京ワックス労組の組合員がやることになるだろう。これを「不法就労」として病院の外へ叩き出すことが物理的にできるだろうか。病室の中や便所や外来医局の中から、大勢の患者や職員たちが見ている前で機動隊が入って「強制排除」できはしない。そんなことをすれば、世論やマスコミも黙ってはいない。長期化すれば、反発は市長に集中するであろう。

結果として、東京ワックス労組による「委託業務」は続けられ、市長と病院当局が「異常事態」の責任をとらざるを得なくなる。ことは社会的な道義問題にまで発展するであろう。いかに島村が独断専横をほしきままにする権力政治家であろうと、機動隊による病院占拠を長く続けることは不可能である。

このような見通しがあったからこそ、あえて「無期限スト」を中止し、「自主就労」によって実質的に業者導入を無効にしておもうという「柔軟戦術」をとることにしたのである。「モップ一本で、私らは、十年以上も市や病院の清掃をして来たのですから、どんなことがあっても仕事だけはしていきますで」とある清掃員は曲った腰を張って毅然と言い切っている。

電話交換手の場合は「ゲリラ的に就労する」ことはできない。人眼に立たない電話交換室に警官隊を入れて組合員を排除することは難しい事ではない。

日世の従業員を中へ入れ、病院当局がその一面を「部外者立入禁止」にしてしまえば、組合側は立ち入ることができなくなる。交換台さえ「奪還」すれば、警官導入で患者に異常感を与えても、対外的には「新業者に委託して正常化した」と強弁することもできるだろうというのが島村の腹である。

一日中「自主就労中」ですと応答される程、市長の面目が丸潰れのことはない。委託業者がいなくても業務が行われていることが天下に知られたら、業者委託の大義名分が成り立たなくなる

からである。

一両日中に電話交換室は当局と警察の手によって占拠されるであろう。清掃と違って自主就労しようにも生産手段がなければどうしようもない。

一本千円のモップと一台何百万もする交換台とのちがいが、労働自体が生産手段である清掃と設備を要する交換業務との違いでもあった。

事実、この紛争が終ってしばらく経ってから、管理課長は姑息なスト対策を行った。夜中のうちに、交換台にあった切り換えスイッチを夜中のうちに守衛室に移してしまったのである。

「スト対策のためにやったのではないが、ストになっても困らなくなったのは事実だね」と、厚見課長は当局の本音をもらしている。恐らく市長直々の命令でやったのであろう。

だが、このような小手先の手段で、組合の抵抗を封じ込めると思っていたのであろうか。ここでは公には出来ないが、当時もとっておきの「**㊦大作戦**」があったのである。この大作戦によって、当局が交換台を警察の手で占拠したり、守衛室に切り換えても、何の効力もなく「自主就労」は実行されたはずである。

それだけでなく、数百本の内線電話の業務分担と担当職員名を間違いなく記憶し、入れ替りの激しい入院患者や、当直業務の不規則な医師を間違いなく電話口に呼び出すためには、半年近く
の経験が必要とする。

にわか仕込みの会社側の交換手たちが、このような「④大作戦」を受けながら通常の交換業務を行うことは、とうてい出来ないことである。

去年暮に入社したばかりの大和にしても、ようやくこの四月頃から他の三人のベテラン交換手たちと同じようなスピードで応答ができるようになったばかりである。

土曜日の午後、清掃員や交換手たちは何度も打ち合わせをして細かな「自主就労」「業者就労拒否」の戦術を練った。現場の者だけが知り得る効果的な「ゲリラ戦術」の数々は、市長室にふんぞり返っている島村や強権だけを頼りに人を威圧することしか知らない警察幹部たちの意表をつくものであった。それは、最新鋭の科学兵器の大量投入によってもベトナム人民の土と生活から生まれたゲリラ戦術の数々と、抵抗する人民の心を破壊することができなかったアメリカと同じである。

来年度に予想される「越委労追い出し」に備えるため、数多くの素晴らしい作戦もあったが、ここでは残念ながら公表する訳にはいかない。

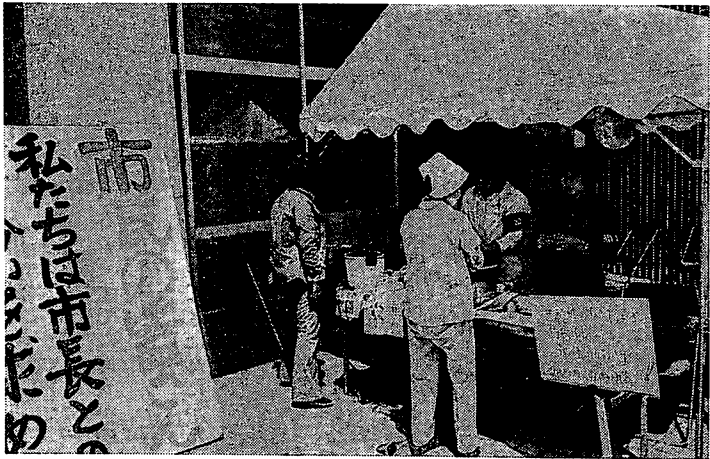
後日の笑い話の中で、この時生み出された奇想天外なアイデアが、職場の中でふいと話題になることがある。

「強制排除させた方が面白かったかもね。そしたら本当に市長が私たちに頭を下げたかも知れないよ」

「あの時は必死だったからね。腹はくくってしまったけど、警察が入って追いだされたらどうなるだろうという恐しさも強かったよ」

数々の運動を経験してきた者から見ると、この時の「病院ゲリラ」はおよそ前例のない柔軟で泥臭い、それだけに確実に当局の「強制排除」を瓦解させたであろうという確信がある。だが、このような「戦術的見通し」によってのみ人は動くものではない。軍隊や警察組織とそこが違うのである。不安と憤りに揺れ動く心が戦術を方向づけ戦術を決定する。こうして、人は知らないうちに自分の人生や価値観を変える大きな転機を自分自からの力で生み出す。その結果が吉と出るか凶と出るか、その時点では判断することができないことも多い。そういう意味で、このような戦術的意義のある戦術が次から次へ現場から生まれてきたことは、この闘いがそれだけ生活や仕事と分ちがたく結びついていたことを物語っている。

島村市長の「強制排除」という恫喝にびっくりし、「何の経験もない小母ちゃ達では争議は闘えないだろうと」勝手に心配した人々は、この時の組合員たちの不安と開き直りの交錯した奇妙な明るさを具体的に知ること、「想像すること」ができないのである。人は本当に困った時、必死の闘いに直面した時、必ず危機を脱する方法を自から思いつき、それによって大きく変えることができるのである。知識や理論はこの経験の後からついてくるものであって、決して知識や理論の有る無しによって人が闘うものではない。



市長交渉を求めるテント闘争

山崎事務局長から「今日の強制排除は何とか思いとどまってもらった。だが、市長は十一日の月曜になっても自主就労するなら強制排除する。これ以上は引き伸ばすことができない」という悲痛な最後通牒がもたらされた。「市長は追いつめられている。彼にとっても警察導入は大きなカケだ。こちらが苦しい時には相手も苦しい。我々は強制排除されてもゲリラ的に自主就労を続ける手段が残っている。だが市長は警察導入を長びかせれば長びかせるだけ不利になって来る。感情的には、今朝一番でも強制排除したかった島村が、今日・明日と引き延ばしたのは我々が屈服するのを待っているのだ」

「ここが正念場だ。こちらが団結して一歩もしりぞかないという決意があれば、良心的な幹部は動揺し市長は完全に孤立する。ここ数日の踏

んぼりだ。皆苦しいと思うが、ギリギリまで職場を守っていこう」

共闘会議側の激励に対して、組合員たちの反応は複雑であった。黙ってうなづく者、目を伏せたまま考え込んでいる者。すでに何人かの者が休んでいる。その人たちも含めて、それぞれが必死になって自分の生き方を決定しようと苦しんでいるのだ。

「せっかくここまで頑張ってきたんだから、今やめてしまつては元も子もない。とにかく明日は全員がちゃんと出ておくれよ」と笠原が大きな声で言いだした。

「病人の具合が悪いとか、どうしても用事がある人はちゃんと言つて下さい」と水上が提案した。だが、誰も休むと言う者はいない。最悪の事態を予想しても、人間らしい意地を通したいという気持で全員の心が一致していたのである。

交換手たちは最後の交換室の整理をした。その日使っていた連絡メモや内線変更帳など、どうしても無くてはならない書類はそれぞれが持ち帰ることにした。

「もう明日で終りだね」

斉藤はおセンチ気味に交換台の上を片付けながら呟やいた。他の三人も同じ気持なのか、黙つて部屋の片付けを続けた。

9 事態收拾を決意する

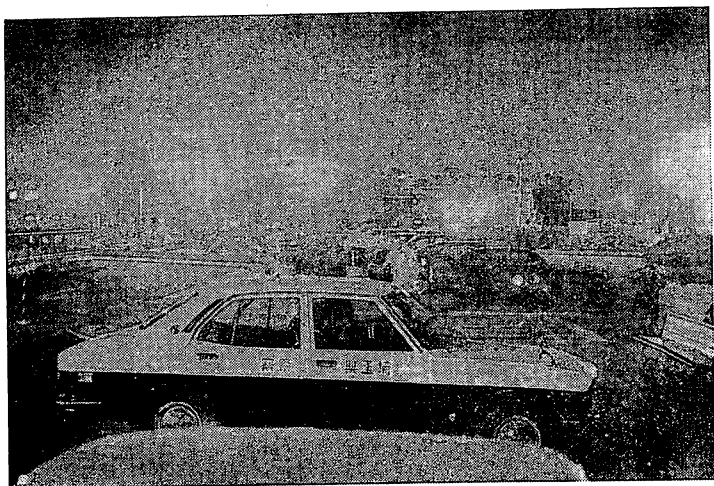
明けて五月十一日(日)の朝、全国紙の地方版、地方新聞は一斉に「自主就労闘争」を報じた。どの新聞にも、「このような不法就労は認められない。断固たる措置をとる」という市長の談話が出ている。島村はいよいよ宣戦布告をしてきたのだ。

前夜、勤務のなかった安原は病院内で夜を明かした。八時前になると組合事務所に組合員たちが出勤して来た。

「新聞見ましたか、市長がこんなこと言ってるが、来るなら来てみるってんだ。病院中逃げ回ってやらあ。それでいいんでしょう」と中台が、力みこんで言う。普段は大声で話す癖が、小母ちゃん達から嫌われているのだが、こんな朝はいかにも頼もし気に聞こえる。

「駅前に今日も日世の車が停まってたけど、やっぱり今日も来るんでしょうか」と牛島が心配そうに言う。

八時過ぎに弁護士の上井が思いつめたような表情をして、清掃室にやって来た。そして上井



警察も動き出した（病院内にパトカーが）

は、共闘会議のあるメンバーに意外なことを言い出した。

「警察も本格的に動き始めた。特に埼玉委員の君達が狙われている。病院への警察導入と共に埼玉委員や市職にも捜査の手が伸びるかも知れない。もし君らがやられたら闘いはどうなる。自主就労と言っても小母ちゃん達だけでどこまでやれるだろうか。地位保全の仮処分にしても、刑事事件になると裁判所は速決しないだろう。ここは今一度考え直す必要があるんじゃないか」

この数日間、何度も病院に駆けつけ、小母さん達を激励してきた井上だけに、安原もそこまで事態が切迫して来たのを改めて知る思いだった。

「考え直すといっても、無条件で日世と雇用契約を交せば全面屈服だ。とても応ずることがで

きない」

「無条件じゃもち論だめだ。だが、小母ちゃん達の身分保障や元請け責任について少しでも前向きな確認を取るということでどうだろうか。とにかく、職場を失ってしまったって刑事弾圧も受けるということになれば、解雇撤回も長期化してしまふことは君もよく知ってるだろう」

井上が、小母さん達の将来を親味に心配していることは痛い程分った。

青木らはぼちぼち集まってきた支援者と共に、日曜のガランとした病院の廊下の掃除を手伝った。ただ見ているだけでは大したこともなさそうだったが、モップを洗い絞るのにもコツがいり、腰をまげて力を入れてふき掃除をするのも決して楽でないことが分った。「何もないので警備の勤め」という宿直業務を一、二年やっているだけで若い夜警たちも体がなまっているのか、ひっきりなしに背筋を伸ばしている。

「そんなこっちゃ最低賃金も貰えないぜ」と、やって来た山本が夜警たちをからかった。

この日の掃除は午前中に終え、大詰めの全体会議を開くことになった。埼玉各地から自治体合理化に反対している労組や労働グループも応援に来てくれた。埼玉労も正式に支援決定し何人も仲間が駆けつけた。モップやワックスの缶が積まれた組合事務所の中で、小母さん達が握り飯をつくったり、茶を沸かして甲斐甲斐しく遠来の支援者を接待した。

山本、青木、安原、佐々木ら東京ワックス労組特別執行委員がそれぞれの立場での経過報告と

個人的な意見を述べた。青木、安原らは、「とも角、強制排除の威しに屈してはならない。強権発動を行っても、より一層、混乱し長期化するという状況を作ってしまったか、島村を反省させることはできない」と主張した。

「それは分る。だが、長期化した場合、どこまで東京ワックス労組と日常的に行動を共にし、その就労を支援し、生活を保障することができるか。短期的には年休をとっても長期的には無理だ。何とか、強制排除だけは避けられないだろうか」と、佐々木は市職の意見を代表して苦しうに収拾を提案した。

「日世には雇われたくない」「何とか市長に今までのことを反省してもらいたい」「今年は良いけど来年はどうなるのか」と、組合員から様々な不安が出された。

「職場を失っては労働組合としては闘えない。若い活動的な労働者なら争議団を作って闘い、各地に支援やカンパ要請もできるが、年配の人が多くては難しいのではないか。一揆的な考えではなく、日世であろうと、どこであろうと組合の団結を固めて、長期に自主管理体制を確立していけば良い」と「一步後退、二步前進」を主張する者もいた。

市職の佐々木委員長から、助役が話し合いに応じてもよいと言っているという報告があった。

「実は今朝、山崎事務局長から話したいということで、僕と加藤君が局長の自宅に呼ばれた。松尾庶務課長も来ていて、何とか最悪事態をさけたいというんだ。そのために助役との交渉を設定

してもよいと言ってる。何とか解決の糸口を見出したいが、どうだろうか」

「仮に日世と雇用契約を結んで收拾するにしても、無条件でという訳にはいかない。今まで五年の間、委託地獄を放置して来た市の責任を明確にし、今後の制度再検討をはっきり市長自身に約束して貰わねばならない。もち論、今までの組合に対する暴言や敵対的な言動について率直に謝罪して貰わねば皆の気持が収まらない。この点の確認さえあれば、今年度に限り、日世と雇用契約を交し自主就労を中止しても良いのではないだろうか。行政責任を市長に認めさせれば全面敗北ではない」と青木や安原らは最低限の譲歩できる線を提案した。この点で組合員の多くも同意を示した。

「それでは、市長の謝罪もしくは元請け責任の明確化と委託制度の根本的見直しを前提に、全員雇用と労働条件の大幅改善、労働慣行の尊重を約束させるということはどうだろうか。市長の謝罪はむずかしいにしても、今までの違法劣悪な委託条件を改善するという言質が当局から確認できれば事実上の謝罪といえるんじゃないか」

佐々木委員長の最終的な提案について異論はなかった。交渉の仕方は市職三役に一任ということにした。如何に対立するように見えても自治体の労使関係の中では必ず交渉の窓口は開かれる。「共闘会議」方式は運動の大衆化という意義はあるが、使用者側には決して好ましいものではない。彼らは常に「トップ交渉」を設定し、物分りの良い幹部との直取引を追求するものであ

る。そこでは運動のエネルギーや闘争参加者の心情はモノ（労働条件、経済条件）におきかえられ、「どこまで取ったか」ということが唯一の判断基準となる。何がしかの人生と生き方をぶち込んで苦しい闘いをした大衆の心情というものは「トップ交渉」では切り捨てられるしかない。このような危険性を承知で共闘会議はあえて「三役交渉」に事態收拾を一任した。それは、越谷市職労三役が闘争者の心情を常に汲み取って闘ってきたこと。東京ワックス労組、共闘会議の大衆的構成からしても、一般的な「トップ交渉」による独断的な交渉にはならないという確信があったからである。市職労の側から、「交渉経過は絶えず報告する。決定は共闘会議の場で行う」という提案がなされた。

「お願いします。頑張ってください」と東京ワックス労組組合員もようやく喜色をよみがえらせて市職三役に交渉を一任した。

「これで何とかなるんだろうかの」

三役を交渉に送り出してから、気のぬけた様な雰囲気の中でばあちゃんがぼつんと呟やいた。「あの市長が助役や事務局長らの言うことを聞くのかしらね」

交換手たちも半信半疑という面もちだった。明日は強制排除と覚悟していた張りつめた気持が急にはぐらかされて虚脱したような表情である。

「わたしらこれからどうすればいいんでしょう」



「とにかくこれで少しは時間稼ぎができるだろう。少しでもキッチンとした仕事をして、会社がなくても立派に仕事ができることを内外に明らかにすることだ。今まで病院で仕事をしたことがある人。知りあいでも応援してくれる人。誰でもいいから来てもらってほしい。我々の方でも少しでもお手伝いするが、とにかく自主就労の体制を取り続けることだ」

水上たちの心配に対して、「今は仕事を続けることだ」としか青木たちは答えるほかなかった。「交渉は決裂するかも知れない。そうなれば明日は必ず警察が介入して強制排除されるだろう。」

その時は抵抗せずに城を明け渡すしかない。警察が入るとすれば早朝だろう。泊り込める人は組合事務所か、近所に分散して泊って明朝六時には結集してもらいたい。今日これなかった人には、委員の人が分担して電話でいいから全員に話してもらいたい」

だが、夕方になっても誰も帰らなかった。病人を抱えた二、三の者以外は「助役交渉」の結果を待って夜遅くまで待機していた。近くに住む市職労の女性組合員や、看護婦宿舎に住む看護婦たちからの差入れも届いて、重苦しい中にも賑やかな夜は次第に更けていった。

10 市長、再び和議成立をご破産に

佐々木、塩田、正木、加藤らの市職執行部が助役室へ入ったのは、すでに日が傾いてからであった。

藤倉助役・山崎事務局長らから、「とにかく日世と雇用契約を結んでほしい」という申入れがあった。佐々木らは「とも角、警察を入れずに自力で解決しよう。市の姿勢次第では契約に応じてもよい」と切りだした。

助役 市長が個人的に何と言ったか知らないが、市としては現在の従業員は全員雇用を前提にしている。とにかく一日も早く雇用契約を結んでほしい。

市職 市が今までの違法な低賃金を反省し、何らかの形で責任を明らかにすること。委託制度について再検討することを約束してもらいたい。

助役 業務委託した以上、その労働条件は労使間の問題で市は関与できないのが原則だ。ただ、今迄は委託料が低すぎて、業者としても法違反を犯さざるを得なかったということで、市

としても契約内容上の責任は感じてゐる。ただ、委託制度をやめるといふことは、行政合理化の責任上約束することはできない。

市職 今すぐ委託を廃止して直営化しろと言っているわけではない。そういうことも含めて、来年度以降の、委託の在り方を再検討する。そのために事務レベルでの協議を継続するということとどうか。

助役 協議の結果どうなるかは約束できないが、労使間交渉ではない話し合いを継続するということは、やぶさかではない。

話し合いは比較的スムーズに進んだ。助役・事務当局としては警察官を病院に導入して強制排除すれば、二年前の病棟移転騒ぎ以上の大混乱となる。それだけは何としても避けたいという願いがあった。市職としても、できることならそのような事態（結果として来るであろう全員解雇と刑事弾圧）を避けたいという思いである。

問題は、どのような形（文章表現）で市の責任を表現するかということであった。市長の率直な謝罪は難しい。「私から市長に謝罪しろとは言えないよ」と藤倉も困った様子であった。「過去の劣悪な労働条件等を惹き起こした原因として、業者委託契約の内味に問題があった。今後は、元請け責任を自覚して、このようなことが起こらないように委託契約の内容を慎重に検討する」という趣旨で、ようやく文案がまとまったのは夜明け前であった。

助役らが市長に経過報告をして了承を求めるといふことで、いったん休憩になった。支援の労働者の多くは泊り込み体制に入ったが、青木・安原らは交渉経過を知るべく市庁舎内の組合事務所詰めていた。

「九九パーセント合意に達した。後は市長がOKと言さえすればよい」

佐々木らは眠そうな眼をこすりながら組合事務所に入るなり嬉しそうに報告した。前夜に東京ワックス労組の組合員たちが握ってくれた握り飯をほうばりながら、佐々木らもほっとしたような様子であった。

小一時間ほどして、助役から連絡があり、佐々木らは再び助役室へ向かった。

部屋の様子がおかしい。休憩前のなごやかさはなく、助役・事務局長らは重苦しい表情であった。助役は佐々木らが席に落ち着くのを待って、苦し気に話し出した。

「先程の話は御破算にしてもらいたい。市長の同意が得られなかった……」。藤倉も苦し気であったが、山崎の眼は充血し、これから起きる事態を考えて苦悩に歪んでいた。

「今までの局長の苦勞が水の泡だ。それじゃ余りに局長が可哀そうじゃないですか」

佐々木は山崎の顔を見かねて思わず藤倉に言った。その途端に山崎が「ウォーッ」と声をあげて泣き出した。

「……佐々木君、それでももう十分だ。有難とう」

山崎は男泣きに泣きながら、佐々木らに申し訳なきように言った。病院の直接責任者として、最悪の事態を回避し、市にとっても労働者にとっても何とか妥協の道を見出そうとして、ここ数日不眠不休で市内部の根回しをしてきた努力を、島村市長が理解してくれなかった口惜しさもあつたに違いない。

「市長がそういう態度なら、組合としては責任が持てない。強制排除には応じられないが、話し合いは最後まで応じる用意はある。市の方で態度が変わったらいつでも連絡してもらいたい」

佐々木らは、も早助役や事務局長と話すのが辛くなって席を立った。

警察導入回避でまともだった妥協案が、市長に一蹴されたのだ。恐らく市長はこの日、何が何でも実力で自主就労をぶっ潰し、組合員の解雇を目論んでいたであろう。すでに埼玉県警に出動要請を出していたのである。それを助役や事務局長が組合に譲歩するような妥協案をまとめたので、恐らく怒鳴りつけて話し合いをぶっ壊したのであろう。

二年前の病棟移転問題で、島村市長は病院事務局の猛反対で警察導入を見送り、管理職を総動員して入院患者のベッドの移動を強行しようとした。だがこの「自力排除」は看護婦たちの身を挺しての反対によって失敗した。島村はこの時から、「平和的解決」では自分の思い通りにならないことを身に染みて悟ったのであろう。「委託労働者や市職を甘やかしておけばキリがない」という権力者の思い上がった使命感である。或いは、父平市郎が組合や革新政党に振り舞わされ

人間は物ではない！強制移籍反対！

病院当局ぬきで市長自から日世と契約

電話ストでの「迷惑をお他へ

解雇反対 暴力公社にも入らぬ

相対 取場防衛 奥力就労します

市民の皆さん、

三日間わたしたち市民の希望、電話ストの行、市長の方々に、必要と
 企業の方からした、市民市民の希望労働者人々を労働的労働的
 不労者となり、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
 解下さるようお祈りします。

昨日、病院当局宛に、市長自から強制移籍し不労とを契約し、
 夏宮ワックスは、労働者組合を組織して、「労働法違反、労働者
 フリー労働者」のモリは、ロロロロロロロロロロロロロロロロロロ
 私たちは即日世への移籍に反対します。

企業先方から、ゆきまか、オオオオオオオオオオオオオオオオオオ
 というのは、人々を労働的労働的労働的労働的労働的労働的労働的
 人々、こころ、強制移籍の希望です。

人固らしく生き、ゆきたい 強制排除には応じないぞ

昨日の夜、病院との話しの中で、市長「強制移籍決定から安上り
 の希望は、いじり、労働者組合、労働者組合の希望、市長自から
 かつくりたい、こころから労働者、

市長局は、私たちが、勝手にゆらゆらしているのは、労働者人々
 とする強制移籍に、私たちが、私たちが、私たちが、私たちが、私
 として、私たちが、私たちが、私たちが、私たちが、私たちが、私
 市長局、私たちが、私たちが、私たちが、私たちが、私たちが、私
 て、私たちが、私たちが、私たちが、私たちが、私たちが、私

東京ワックス労働組合

「悪徳」ハネ業者追放市立病院委員同席化
 大々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

て任期中で辞任に追い込まれた怨みを晴ら

す、逆の意味での父親コンプレックスが働いて

いたとしか思えない逆上ぶりと言うほかない。

組合事務所でもウトウト待機していた全員が叩

き起こされた。も早、この日の警察導入は避け

られなかった。全員に厳しい緊張感が漂った。

近辺に宿泊している者を直ちに呼び出す手配が
 行われた。

病院の組合事務所にとつて返し寝ているもの

を起す。急をきいて共闘会議の労働者が続々

と集まって来た。すでに東の空は白々明け始め

ていた。

頑張ろう

突きあげる空に

黒鋼の男のこぶしがある

燃えあがる女のこぶしがある

闘いはここから 闘いは今から

頑張ろう……………突きあげる空に

闘いの正念場で必ず歌われる「ガンパロウ」を何度も何度も歌いながら、全員が強制排除に備えての配置についた。

緊急事態を訴えるでっかい立看板や病院内掲示を書く者。二人ずつ組みになって車で周辺パトロールをする者。炊き出しをする者。市職組合員の有志に非常呼集をかける者。夜勤の看護婦詰所に事情説明に行く者。時間を追って集まる者が増え、人の動きは慌しくなって来た。

午前七時。いつもより一時間早く組合員が出勤して来た。佐々木らが全員を集めて詳しい交渉経過を報告した。

市長が全員雇用できないと言いだした以上、も早交渉の余地はない。年配の労働者を何年も病院のため下積みの仕事で安い賃金で働かせておいて、何の痛みも感じない島村市長に対する怒りで全員の腹は決った。

「追いだされても、追いだされても仕事は続ける。不法就労だといわれてもオラたちにはそれしかできない」と水上が皆の決意を代表して述べた。共闘会議も徹底抗戦Ⅱ長期に粘り強く就労闘争をやることで全員が一致した。

「機動隊が越谷市に集結し、病院に向かって動き始めたなら全員が玄関前に集合する。病院内に突入

しそうになったら、全支援者は玄関前で抗議集会を一日行う。病院が機動隊に制圧された後は、このような抗議行動を病院内外で連日行う。徹底した市中情宣によって、この異常事態を社会的にバクロする。いわば非暴力抵抗闘争をしつこくやり続けることだ。くれぐれも、不法占拠、暴力事件デッチあげの口実を与えないよう慎重に行動する。昼からは、病院、市役所、駅頭、市街で『強制排除抗議署名』を行い、夕方は駅前で大抗議集会を開く」

共闘会議では遅くまで協議した当日の行動方針を全員に再確認した。島村の「強制排除」を空ぶりに終らせ、事後の刑事弾圧の口実を与えず、島村の強権・警察政治の実体を患者、市民に徹底的にバクロし、長期の警察管理によって市民の反発を島村市長一人に集中しようという方針であった。

陣地を放棄し、城内に敵をさそい込み、周辺の決起と城内カク乱によって敵を孤立させるといふ古典的な大衆包囲作戦である。かつての日本軍もベトナムのアメリカ軍も、古くはロシア出兵のナポレオン、ヒトラーもすべてこの戦術によって包囲討伐されたのである。

確かに何人かの組合員はこの日も「恐しくて」来れなかったのは事実である。助っ人に頼んだ元の従業員も来てはくれなかった。

だが、この一カ月、家庭内での仕事を犠牲にし、息子やしゅうとに気兼ねし、病身の夫を気づかいながら必死で闘ってきた最初から病院にいる清掃員たちや交換手たちは全員張り切って来て

いたのである。「強制排除」と聞いても、警察は「正しい者の味方」だと思っているだけに「私たちは間違ったことはしていない」と恐れてはいなかった。かえって、生じっかに運動し、自身や周辺で「弾圧」を受けた者ほど警察力を過大に評価し恐れるものである。東京ワックス労働組合員には「恐いもの知らず」の強さがあった。

「いよいよね、武者ぶるいしちゃうわ」

「ここまで来たらもう恐さも通り越しちゃったよ」

交換手たちは声を上げて笑った。

午前八時を過ぎても警察の動く気配はない。助役や事務局長が必死で市長を説得しているのであろうか。事務局長はもち論、管理課長、庶務課長、院長らはすべて市庁舎に集まっている模様。恐らく、最終決断をめぐって協議が重ねられていたのであろう。

八時二十分、業務を開始した交換手たちはこの日の朝から「自主就労宣言」を一時期棚上げし、普段通りの事務的な応答を始めた。直接的口実として市長の怒りの対象であった「自主就労中です……」という宣伝的応答をやめることによって、市長は社会的には排除の口実を失う。それはまた、助役や局長の「和平交渉」の成果としての組合側の譲歩を示し、市幹部良識派の発言力を増大させる。このような狙いが効を奏したのであろう。市長と警察は警官導入の口実とキッカケを失って、ジリッジリッと時間は経っていった。

「病院の回りを変な車がうろついている」という連絡があった。何人かが駆けつけてみると案の定、駐車場の端に停められた車の中から二人の若い男が病院の様子を伺っている。ヒロキが身分と用件を聞いたすと、彼らは、「お前らに言う必要はない」と威高丈な刑事根性を丸出しにした。ハンドマイクで「私服刑事が警察導入の下見に来ています。市民、患者の皆さん、この車のナンバーをよく見ておいて下さい」と病室に向って宣伝を始めると、私服は「お前の顔こそ覚えておいてやるからな」と捨てぜりふを吐いて慌てて逃げて行った。

十時頃になって、市中パトロールに出っていた労働者から、「浦和方面から来た機動隊が越谷に入った」という連絡が入って来た。

ついに県警の機動隊がやって来たのだ。組合事務所にした者の間に緊張感がにわかには広がった。周辺の連絡係を集めて、越谷署、駅前などに重点的な張り込みを行ってもらう。

「来た、来たってよ、どうしよう」

連絡を受けた馬場が仲間にも叫ぶように言った。全員が赤いハチ巻きをしめ、腕章をしている。ついに、最後の瞬間がやってきたのだ。胸がキュンと絞められるように痛くなり、ドウキが激しくなる。斉藤も鈴木も大和も同じ思いなのだろう。外線からの呼び出しの声が急に遠くになってくようであった。

「あの時は本当にもうお終いだって思った。共闘会議からいつ退去するように言われるか気がき



偵察に来た覆面パトカー

でなかったものね」と馬場や斉藤は当時の気持を語っている。

だが、昼近くなっても部隊が動く気配はない。市役所の裏に装甲車が一台停まっているが、中に機動隊員のいる様子はないという連絡が入った。日世の車は相変わらず駅前に来ているが、会社の人間は駅前のレストランに入って朝から何杯もコーヒを呑み、ケーキをばくついているという連絡もあった。外勤の市職員から北越谷の駅前に機動隊の車が停まっていると通報があった。

病院への人の出入りが慌しくなった。議員や新聞記者が現われては病院の様子を見ていく。社会党や地区労からも激励に何人もの人が現われ、心配そうに市職の役員と話し合っている。

「青木さんどうだろうね。今一度市と交渉を持ったら。市長が全員雇用を保証しない。ストや自主就労をやる組合員はいらないうっていつてるらしい。現に、段々来る人が少なくなっている。このままいけば権沢のように組合を辞めて日世に走る者も出てくるだろう。そうなれば残って頑張ってきた人が全員クビになる心配もある」

井上弁護士が心配でたまらないといった様子で、青木や安原らに話しかけてきた。

「市長の本音としては市職や我々に踊らされていると奴が考え

ている組合員を追いだしたいんですよ。そんなことは絶対させない。これ以上崩れる心配はありません。組合員一人ひとりの考えを聞いて下さいよ。向こうが問答無用と言ってるのに交渉の仕様もないでしょう。それより、こうなったら今すぐにも地位保全の仮処分の申請をしましゅうよ」と安原。

「もち論、その準備はしている。だが一旦職場を排除されたら、地位保全や就労命令が出るまでに相当の時間がかかる。それより、何とか全員雇用を再確認させた方が、皆も安心じゃないか」

「でも市長は、組合（＝市職）とも話さないと云ってるんですよ。助役や局長と話しても仕方がないのだから交渉もできないでしょう」

「いや、市職と話さなくても、議員が申入れれば話は別だ。市政の実力者と言われるFや高橋努議員、元議員の吉岡さんなら会うんじゃないかと思うんだが……」

安原は青木と顔を見合わせた。助役交渉は共闘会議で討議して市職三役に一任した。共闘会議の一員としての彼らが組合員の真意をそれなりにつかんでいたからである。だが、井上弁護士はともかく、議員ということになると話はちがってくる。議員には議員固有の関係が市の執行部との間に生まれてくる。早い話が、議員歳費の値上げに表向きは一貫して反対している某政党でも、いったん決定されれば値上げ分を何喰わぬ顔をして貰っているのである。議員と市の執行部

にはそれなりの利害関係の一致がある。もしも島村のような權威主義・事大主義の市長なら労働組合とは話をしなくても議員となら社会党であれ、何党であれ会うことは会うだろう。

だが、そこで一方的に譲歩を迫られた場合、何らかの形で交渉をまとめなければならぬ立場にある彼らが、最低条件まで追いつめられないという保障はない。代表交渉と言っても、運動者自身の中からの代表ではなく、代理人交渉になってしまうことを覚悟しなければならない。これは、個々の代理人の良し悪しの問題ではなく、誰が代理人になっても現場感覚とのズレが一定程度出てくることは避けられないのである。

このような危倶はあっても、やはり交渉を求めずにはいられたなかった。もはや市長が強行策を捨てるとは考えられないが、少なくとも強権発動だけは喰い止めねばならない。時間を引き伸ばせば、強制排除はそれだけやりにくくなる。こちら側がこぶしを振り上げてない以上、向こうが一方的にこぶしを振り上げる訳にはいかないものである。少なくとも交渉している間だけでも強権発動はできないだろう。長びけば長びくだけ「空白の期間」は既成事実化する。ここは粘れるだけ粘るしかない。

かくて、社会党議員と井上弁護士を中心にして新たな交渉団が結成された。交渉条件は「全員雇用の再確認」「労働慣行の尊重」「委託制度の再検討」の三点であった。

だが、助役・事務局長を相手としてこの日の夜から始まった交渉は果せるかな難行を極めた。

市長の強行方針は変わらない。委託制度は飽くまで変える積りはない。雇用については会社側の問題であると市側が今度は強く出てきたのである。

交渉団 どうして市長が全員雇用が保証できないと言っているのか。市の言い分ではそれは労使

問題であり、市としては全員雇用する業者を選定したはずではないのか。

市当局 当初はそういう確認であった。だが、九日から新業者と契約したのにそちらが雇用に応じないため事情が変わっている。

交渉団 事情の変化とは何か。

市当局 たとえば、組合が雇用に応じないため会社は従業員を雇用した。この人たちを首にするわけにはいかない。

交渉団 現実に業務は支障なく行われている。話がついた時点で日世が全員雇用する気なら、従業員を採用する必要がなかったのではないか。

市当局 組合では最初無期限ストと宣伝していた。これでは業務責任が果せないから会社としては従業員を新たに手配してしまっている。

交渉団 それは日世がスト破りしようとしたからで、こっちは関係ない。現従業員の全員雇用は当初からの確約ではなかったのか。

市当局 それはそうだが、現時点では新たな問題が起きている。これを解決しなければ現従業員
の全員雇用に応じられないというのが会社の言い分だ。市長はいずれにせよ労使問題は会社の
問題で市として関与する必要はないと言っている。全員雇用の話は会社側と直接話し合っても
らいたい。

市当局の元請け責任を明らかにし、委託制度の再検討を何らかの形で約束させた上で、雇用契
約の内容へと進めるべき交渉の手順が逆になって、全員雇用か否かと会社・市側のペースに完全
に引き込まれてしまった。日曜までは警察導入したくないという事務当局の思いをつけて組合側
が有利に交渉を進めてきた。だが、この朝から立場は逆転した。すでに強権は発動され、強制排
除が全員解雇を意味する大きな圧力となって組合側の屈服を迫ってきている。

島村市長のやり方はいつもこのように、事務レベルで煮つめてきた平和的交渉を白紙に戻し、
行政論、政策論を棚上げにして強権的に自分の提案を相手に吞ませるといふ攻撃型行政である。

しかも今回は、市として文書で再三確認した全員雇業者のせいにして破棄しようとする破
廉恥さである。本来なら、「業者と話し合うべき筋合いではない」とこの提案を蹴って強権排除
だけは避けつつ、じっくりと市長の非を社会的に追求すべきだった。そのための組合側の主体的
条件も客観的状况も次第に有利になって来つつあった。

だが、この時点ではこのような彼我的社会的関係の変化を冷静に判断するゆとりが交渉団にも

共闘会議にもなかった。「強制排除→全員解雇」か「全員雇用」かという島村市長お得意の二者択一を迫られては「雇用第一主義」を路線として掲げている政党の議員が「まず雇用を確保することが先決」と判断するのやむを得なかった。共闘会議側にしても「ここまで来れば一時的に追い出されてでも意地でも市長の強権に反対する」という考えと、「クビになったらお終いだ」という考えとの間で最後まで揺れていたのも事実である。

「とにかく職場の確保が先決だ。日世がいくら暴力企業であろうと、いったん雇用したら労使紛争で簡単にクビにする訳にはいかない。組合と共闘会議ががちりスクラムを組んでいけば会社の一方的な職場支配に抵抗することができる。市の元請け責任の追及はそれからじっくり構えても遅くはない」

良識的にはこれが労働組合の一般的考えである。だが、島村市長にはこのような良識が通用しないことは、半年後の東部清掃第二工場の民間下請け化とそれに続くデッチ上げ刑事弾圧、組合破壊攻撃を見ても明らかである。良し悪しは別にして、島村市長は父平市郎市長のような事なかれ主義で市政の懸案事項の解決を後へ後へ伸ばすという曖昧さを持ってはいない。根っからの権力的思考と土木屋としての機械的な合理主義によって、自分の信念を曲げない一徹さを持っている。このような増長慢な男には良職や人道的な考えは通用しない。力づくで対決し、自からの血を流してでも市長自身に味合わせるしかないのである。



藤倉助役はいつも市長の尻ぬぐい（対市職交渉）

事実、この時の曖昧な解決は、その後の越委労の粘り強い雇用なき自主就労によって組合側の勝利に終わった。だが島村はこの時強権を持って組合を潰し切れなかったことを「反省し」、東部清掃第二工場民間下請け化に際しては自からの「信念」を押し通した。共同理事者たる草加・吉川、松伏、三郷、八潮の五市町長や工場事務局の反対を押し切って、又もや強権介入の切札をちらつかせつつ、労働者の既得権を一方的に奪って労働者の中に動揺と分裂を引き起こし、ついにはデッチ上げの刑事弾圧をもって諸合理化を強行した。

それ以降もこの勢いに乗じて、「昼窓（＝昼休みの窓口業務）」を強行し、越谷市職の誇る民主的な給料体系「通し号俸」制に揺さぶりをかけている。現在は「病院赤字解消」のため病院身売り（＝職員解雇）をちらつかせつつ大幅な人員削減を目論んでさえている。越委労に対しても一切の話合いを拒否し、過去の病院当局との確認すら反古にするという強硬姿勢をとってきている。

助役室に内海と早乙女、川前らが勝ち誇ったように入ってきた。

内海 今さら全員雇用なんて言っても、雇用を拒否してきたんはそっちじゃないか。そのためにこっちは高い金を払って募集広告を出して、何人もの従業員を雇ったんだ。今さらその人たちに解雇すれば新たな解雇問題が起こる。その責任をあんたらがとってくれるのかね。市で雇ってくれると言うならよいんだがね。

内海は攻撃的であった。確かに会社としては公けに九日時点での雇用は拒否された。委託業者として、契約責任を果すために従業員を募集するのも一理ある。委託業者を認め、「雇って下さい」とお願いすれば彼らが開き直ってくるのは当然だ。

交渉団 雇った雇ったというがその証拠を見せてみる。九日の日だって何人も来ていない。駅前で待機していると言ったって、新しく雇った人間か元々の会社の従業員か分らない。雇用者のリストを見せよ。

早乙女 初日に追い払われたから、従業員の安全のために現在は自宅待機させている。氏名を公表すれば組合に攻撃されるから見せる訳にはいかない。嘘ではない証拠に助役さんが直接電話をしてもらえば分ることだ。

藤倉助役が早乙女からリストを貰って市長室に入って何人かにわざとらしく電話をした。

藤倉 確かに採用が決定されて自宅待機している。市立病院の電話交換として採用されたのだから、今さら取り消しと言われても困ると言っている。

市職 応募者にははっきりと紛争中だ。採用されても雇用の保証はないと組合で説明している。

無理矢理会社が採用を決定しても拘束力はない。

交渉団 清掃は他に配転することも可能なはずだ。交換手には事情を説明してこの間の賃金と相

当の慰謝料を払えば納得してもらえないか。

早乙女 その金は市が保証してくれるのか。異常事態のために会社の管理者全員と主だった従業員が何日もの間、持ち場を離れて待機した。そのため重大な他の契約にも支障が生じて会社の損害は甚大だ。

藤倉 どういう形で払うかは別にして、雇用が確認された者についての経費は、契約後の出費と見なさざるを得ないだろう。

内海 金をもらえばいいっていうもんじゃない。今後の労使関係が安定するという保障があるのか。団交と言っても従業員以外の者が大挙して押しかけてくるという状況では労使関係は安定しない。事ごとにストをやられれば契約業務を果せない。仕事をする気のない従業員まで会社としては雇えない。

会社側はついに本音を出してきた。新従業員を雇ったとか、そのための雇用保障や経費増大など、ただの言いがかりに過ぎない。仲間を裏切り会社に尾を振る従業員以外は要らないというのが会社の本音である。会社と言うより「ストをやるような労働者は要らない」と新聞記者に語

った島村市長の代弁を会社側が始めたのである。話し合いは難行した。夜すでに遅くなって藤倉助役は「私は疲れているので失礼するが、ここで話し合ってもらって結構だから煮つまつたら連絡してもらいたい」と言って中座した。代表団と内海らとの間に全員雇用をめぐる激しいやりとりが再び始まった。

その時、深堀秘書課長が隣室の市長室との扉を開けて入って来た。

「いつまでもここで話しては困る。出て行ってもらいたい」

「何を言ってるんだ。助役の許可を得て交渉しているんだ。あなたにそんなことを言われる筋合いはない」

「ここも秘書課長としての私の管理下にある。助役がどう言おうと管理上困るんだ」

「てめえ、俺がバッチがないからってなめると後で吠え面かかしてやるぞ。公務上の立場でかってなことをしている証拠は一杯あがってるんだ」

前市会議員の吉岡が深堀を睨みつけた。深堀には色々良くない噂がある。吉岡の一言で深堀は黙って引っ込んでしまった。おそらく市長の本音を会社側が不用意にさらけ出してしまったので、慌てて話し合いを止めさせようとして来たのであろう。この時のタイミングから言っても、彼が市長室の壁にはりついてお得意の盗聴、作戦をしていたかも知れないのである。

「市はあくまで全員雇用を前提として日世と契約したのではないのか。日世がその前提を破棄す



決着に向けて討議も白熱（後は地区労の支援者）

るのなら市が嘘をついたことになるがどうか。局長や総務部長はこの前提を破るといふことなのか」

交渉団は、厳しく市の責任を追求した。しかし、最終的な契約の場に山崎は立ち会っていない。市長側（恐らく深堀秘書課長と助役または総務部長）がどのような暗黙の指示を日世に与えて契約したか定かではなかった。

局長や総務部長は「もう一度市長の最終態度を確かめる。出来れば市長に交渉の場に出てもらう」と市長交渉の要望に答え、一時休憩することになった。すでに夜明け前であった。

交渉団がうとうと仮眠している間もなく、事務局長から、「何とか市長に交渉に出てもらふことになった。午前七時から再開する」という連絡が入った。

「いよいよ正念場だ。市長と日世がグルになって労組の切り崩しを図っているのは明白だ。こうなれば全員雇用と元請け責任明確化の二点にしぼって決着をつけるしかない」

交渉経過を聞いた山本や安原らは交渉のギリギリの譲歩内容を確認して、再び交渉団を送り出した。

「埼玉労の動きがおかしい。昨日開かれる予定だった書記局会議が流れたというのに、浦和の事務所に誰もいない。今日の夜になって明日執行委員会を開くという連絡が一方的に入った。議題も何も知らされていないが、僕と柳沢（＝当時埼玉労執行委員）だけで行ってくるから今日はそちらへ行けない」

この前夜から勤務に入っていた青木から奇妙な連絡が入った。五月に入ってから埼玉労の動きがおかしい。大衆運動で始まった「留守番電話導入阻止」闘争の確認がいつの間にか「三役交渉による県当局への導入中止のお願い」にすりかえられ、事務局会議も執行委員会も開かれていない。大話に入った東京ワックス労組の闘いにも、青木らの再三の支援要請にもかかわらず、埼玉労三役も書記局からも誰一人として参加しようとしなかった。

「青木さんと柳沢さんはどこへ行ったの」

五月六日から埼玉労東一分会（＝当時）の若手グループ全員と西部地区の若干の有志は連日病院へ詰めていた。勤務のある日もギリギリまで病院におり、夜勤明けと共に一番で病院へ来た。

それだけに、東京ワックス労組の組合員とも全員が急速に親しくなった。特に、黙々と「援掃」に精を出していた青木や柳沢の姿が見えないことで組合員たちは不審気に聞いたのだ。

「今日は埼玉労の執行委員会があるんだ。あの二人は執行委員のお偉いさんだから今日は来れない。本部が支援に来ないのはけしからんと追及して、闘争が長期化した場合の支援体制を確認してくるって言うから心配ないよ」

ヒロキが交換手たちに気楽そうに説明した。何たるお人好しであったのか?! この闘いの大詰を迎えて、全国でも唯一の委託労働者の横断組合埼玉労は、闘いの支援はおろか、中心になって心血をそそいで闘っている者を「統制処分」にせんと、秘かに本部書記局員を中心にして陰謀を巡らしていたのである。

11 玉虫色の四項目確認書で解決

五月十三日(火)午前七時、越谷市長・島村慎市郎がついに交渉の場に姿を現わした。東京ワックス労組が組合を結成し、市長に話し合いを申入れてから実に四〇日ぶりである。この四〇日間、

東京ワックス労組員が解雇と生活の不安におびやかされて必死で市長との話し合いを求めてきたのに対し、島村は「バカヤロー」「関係ない」としか組合員に語らなかつた。切羽つまってやつたストライキや自主就労したのがけしからんと、警察の力を借りて強制的に排除しようとし、その思惑が外れると、会社をダシに使つて解雇策動を続けてきたのである。

だが、東京ワックス労組の粘り強い団結と、市職・埼委労東一分会（Ⅱ当時）を中心にした共闘会議の大衆的支援。そして、市職三役、社会党市議など交渉団のしぶとい交渉によって、ついに島村は姿を現わした。

「委託会社の労使問題には市は関与しない」と言い続けた島村にとって、藤倉助役や山崎事務局長らの必死の説得で組合（代理人）の前に登場せざるを得なかつたこと自体が敗北である。島村は深く「敗北」を認めて、市の元請け責任を明確にし、紛争の根本的解決のために、低賃金と委託差別に耐えて市立病院の清掃や電話交換業務を守つてきた東京ワックス労組員に一言の謝罪とねぎらいを行ふべきであつた。だが、性来の傲慢さと坊ちゃん育ちで我まま一杯に育つた島村は、この土壇場に来てでも往生際の悪い責任のがれを繰り返すだけであつた。

交渉団 会社側はストをやるような組合員は雇用できないと言っているが、これは全員雇用を前提にした業者と契約を交すという、市当局の確約を反古にするものではないか。

市長 説明会の前までは会社も全員雇用と言っていたのではないのか。契約成立後に組合が雇用に応ぜずそういうことを続けたから、会社が雇えないと言いだしたのだろう。それは会社の判断であり、市が関与するところではない。

交渉団 それはおかしい。市長はある新聞記者にストや自主就労するような組合員の雇用は保障できないと言っているではないか。これは労使問題に対する不当介入ではないか。

市長 自分の個人的意見を聞かれたから答えたままで、市としては労使に不介入の態度は変えていない。会社と組合が話し合って解決するものならそれに越したことはない。

自分の発言を鋭くつかれて狼狽した市長は会社側の面前ではっきりと不介入を言明した。会社側としては雇用に応じないと市当局の確約（＝契約の前提条件）を勝手に破棄したことになる。ストライキを口実に雇用拒否すれば、不当労働行為になる。交渉団はこの矛盾を鋭く追及した。市長 市としては病院の医療活動に支障がない限りストしようが何しようが関係ない。市としては前従業員が希望するなら日世が雇用すべきだと考える。新しく雇用了従業員をどうするかは会社の問題だ。いずれにせよ、私はこれ以上関知できないから労使の代表で話し合って早く決着をつけてもらいたい。

島村は「もうどうでもいいや」という感じで部屋を出て行った。助役や局長は残って交渉をまとめることになった。市職三役は市長がふり上げたこぶしをついにしぶしぶ下ろしたと判断し



一体いつ解決するのかと不安に

た。こうなれば解決は時間の問題だ。

「市長が関係ないって言うんなら日世だけが雇
用拒否することはできないだろう」

共闘会議では交渉経過を聞いて、和解条件を
話し合った。

「問題はこういう条件で解決するかだ。今までの
労使慣行、とくにこの間の自主的な職場運営
を認めさせること。そのためには労働協約をあ
らかじめ決めてから雇用契約を結ぶことを大前
提にしてもらいたい」と、安原らは注文をつけ
た。これが最低の譲歩内容であった。

「市長が出て来たって、よかったね」

「今日中に解決するかね」

「会社の方は金の問題だけだから、何とでもなるんじゃないか。夕方までにはケリがつく
んじゃないか」

出勤してすぐに、交渉経過を聞いた小母ちゃん達は不安そうだったが、とにかくここまでくれば待つしかない。十日以来四人ほどが休んだままである。執行委員たちも疲れがたまっていたが休むわけにはいかない。

「ねえ、何とか仕事を手伝ってくれないかい。身体の方はもういいんだろう。少しの間だけでもいいからさ」

笠原はかつて病院で働き、具合が悪くなって辞めたTさんを病院内で見かけて声をかけた。Tさんは辞めるつもりはなかったのだが、何ヵ月も休めば辞めさせられるのは分っていたので、そのまま来なくなっていたのだ。時々病院には来るが、身体の方は良くなったというので助っ人を頼んだのだ。

「でもねえ、会社に雇われてないのに働いたってお金もらえないんじゃないかい」とTさんは気のりなさそうに言った。「そりゃ、あんたらが一生懸命やっているのは分っているけど、毎日こんな調子じゃねえ」

笠原たちは、他にも何人もの人に声をかけていた。一度でも清掃で働いた人、近所でパートに行っている人や、少しでも暇のありそうな人に頼んでみた。だが、誰も手伝ってはくれなかった。腕算をしながら働いている彼女たちをみて、恐ろし気に首を振るだけだった。

「仕方ないよ。私らだって成行きで必死にやっているんだから、今さら手伝ってくれたってお

っかながるのも無理ないよ」

近所付き合いが良く顔の広い秋谷も諦めた風であった。普段の時なら、手伝ってくれそうな農家の主婦たちも秋谷の頼みにも「済まないね」と言うだけだった。

「ここんところは埼玉の若い衆に手伝ってもらって、来てる者だけでやるしかない。解決したら皆も来てくれるだろうから、もう少しの辛抱だよ」

水上は十人ばかりの清掃員を見回して皆を励ました。湯沢の近くの雪深い山国に育ち、一年の半分は東京へ出稼ぎに出てきて製本屋の手伝いを長年やってきた水上は、越後人特有の辛抱強さを持っていた。「こうなったらオラ一人になっても皆のために仕事だけは続ける」だが几帳面な水上にとっては、紛争のこともさることながら日に日に汚れが目立っていく病室やロビーのことが何よりも気がかりだった。

再開された交渉は遅々として進まなかった。会社側も必死だ。「組合員だけならともかく、交渉のたびにワ〜ッときてやられたら円満な労使関係は保てない。市職や埼玉委労（Ⅱ当時）を介させないと約束してくれるなら全員雇用に応じ、東京ワックス労組を交渉団体としてよい」と内海が言いだしたのである。これが内海や市長の本音であったのだろう。

もともと市職労の出身である高橋、吉岡や井上弁護士がこのような条件を呑めるわけではない。

しかし、「この条件を呑まなければ労使関係の安定は保てない。従って雇用に応じるわけにはいかない」と会社側は強硬であった。

「佐々木君どうするかね。当該だけで交渉していくのは無理だろうか」

「今すぐは無理でしょう。短時間の間に組合員の成長は著しいものがある。だが、現在の地点で共闘会議の支援ぬぎに海千山千のハイエナ企業とわたりあうのはまだ出来ないでしょう。雇用されても組合がつぶされてしまつてはどうにもならない」

井上は佐々木や野田を別室に呼んで相談した。何とか良い知恵はないだろうか。

「第三者を介入させないと言つても、組合が正式に交渉権を委任したものは団交の席上では当事者になれる（労働組合法第六条）。交渉に参加させないとか委任しないとか明文化しなければ、労使関係一般に第三者を介入させないと約束してもいいんじゃないか。第三者と書いたつて、委任を、受ければ当事者資格が発生して第三者でなくなるんだからね」

「彼らがどのように解釈しようが、法律的には市職役員や埼委労組合員（＝当時）に交渉を委任していいんだから問題はない。もともと、彼らが組合の委任を受けている市職や埼委労（＝当時）の人間を第三者として排除しようとしていること自体が間違っているんだから、後で文句を言つて来てもけつぽれば良いんだ」

「だがそれにしても、もう一度共闘会議全体で確認しておく必要がありますよ」と佐々木は埼委

労やその他の支援団体を集めることを提案した。

彼らが、このような苦しい交渉を続けていた時、外では予想もつかなかった異変が起こっていた。埼玉労執行委員会が、この間東京ワックス労組の結成から支援に全力を挙げて取り組んでいた青木衆一ら四名を「統制処分」したのである。

この日の夕方おそく、埼玉労執行委員会に出席していた青木、柳沢の二人が清掃控室に戻ってきた。普段でも瘦せた二人の表情は険しく、眼は憤りの余り異様に輝やいているように見えた。

「今日僕たちは埼玉労の執行委員会で権利停止の処分を受け、僕は一切の役職を解任されました。藤本君、安原君、ヒロキ君の三名は組合員としての権利停止、要するに一切の活動をするなという処分を受けました。」

理由は、勝手に共闘会議に参加し、警察の強制排除によって埼玉労そのものを弾圧させる危機まで追いやったということです。そして、これ以上の活動は許さないということです。そうなれば、私たちは埼玉労として共闘会議に参加することもできないし一切の支援もできない。

私は、「この重大な局面で小母ちゃん達を見捨てることはできない。どうしても処分するといふなら埼玉労を脱退する」と宣言して来ました。これからも、今迄通り皆さんと最後まで闘い抜くつもりです」

一瞬、組合員達は大きな驚きにうたれた。今の今まで青木らが埼玉労の一員として闘ってきた

ものとはかり思っていた。県下で四三〇名の組合員を擁する委託労働者組合の委員長である森田が組合の結成大会に参加して激励し、金一封までおいていってくれたのではないか。それを今更知らぬ顔をして献身的に活動してきた青木らを処分するという。小母ちゃん達には想像もできないことであつた。

電話交換手たちも、「ワーツ」と泣き出した。何人かのばあちゃんたちも涙ぐんでいる。(巻末資料参照)

「僕も、衆一君が処分され脱退するのなら、執行委員として行動を共にしてきたのだから、僕もやめると言ってきました」と柳沢もうわずつた声で報告した。

「青木さん、がんばって下さいよ。今度は私らが応援するけんね」

鈴木ミネが青木の手を握りしめて激励した。組合員たちは一斉に拍手をした。

「こうなったら、青木さんらに組合に入ってもらつて、一緒にやりましょう」と水上が呼びかけた。「休む人も多くて困ってるから、埼委労はやめて私らと一緒に働いて下さいよ」

「ありがとうございます。でも警備員はやめませんよ。仕事のことでお手伝いできることは何でもします。こうなったら、どこまでも皆さんと一緒に闘つて、闘う者を処分しないような委託労働者の大きな組合をつくっていきたいと思います。よろしくお願いします」

※ この後十月になつて青木らは、埼玉学校委託労働者組合(≡学委労)を結成する。今後ここでは便宜

上、現在の学委労組合員はすべて学委労と表記する。

「交渉の重大局面につき、至急共闘会議を開きたい」という佐々木からの連絡が入ったのは、丁度青木らが全体会議で「処分」報告をし、涙ながらに団結を誓い合っていたところであった。

「いよいよ大詰だ。埼委労の我々に対する処分が明らかとなれば、市長は再度強硬姿勢に転じてくるかも知れない。こうなっては相当の譲歩をしても今夜中に決着をつけるしかないのかも知れない」

青木は沈痛そうに呟やいた。(埼委労本部は自分たちが弾圧を受けないように東京ワックス闘争に関係ないことを誰に証明するために我々を処分したのだろうか)と深い憤りと疑惑を抱いて、迎えに来た市職組合員の車に乗り込んだ。

「ふむ、いよいよ決断をせねばなりませんね」と、車に乗った猿田彦があごをなでて言った「また一首浮かびましたよ」

決着ふんぎりをつける積りの箱車

戦いくさきりなき霧の夜かな

「おや、今度のは随分わかりやすいですな」と安原がひやかした。



越委労と学委労は兄弟組合として固く団結している

「もうここまで来れば、気どっても仕方ありませんからね。まあ、狂歌としてはひねりが貧しくて余り良いでじゃないんですが」

「いや、当意即妙、あまりひねくり回さず我々の心情が出てて良い句です」と青木が愁眉を開いて言った。

まさに、この夜は朧月夜に霧が立ち込め、自動車のヘッドライトにぼんやりと川向うの市庁舎が浮かびあがっていた。

「理屈は分りましたが、第三者というのはやはりまずい。法律的には問題ないのだろうが、後で欺した、欺さないということになりますよ。それより、労使以外の『他の者』ということにすれば、労使双方（から委任された者を含む）以外の他の者ということになって、欺したと言われることにはならないでしょう」

安原や青木は、佐々木らから交渉経過を聞いてこのように指摘した。すでに東京ワックス労組では收拾の具体的方法については共闘会議および委員長一任をとりつけて来ていた。

「私は詳しいことは分りませんが、それで今後とも、市職労や学委労の皆さんに応援してもらえ
るのなら、私はそれで結構です」と水上も同意した。

「よし、それで決まった。後は、労働協約を雇用以前に結ぶかどうか。雇用契約の形式をどうする
かだが」と井上。

「労働協約を雇用契約以前に結ぶという従来の主張では会社は難色を示すでしょう。できれば、
契約と協約は同時に、時間的に少々後先になっても基本的には一体のものとして確認されればよ
いでしょう」

「雇用の形式は会社の言う個別面接は必要ない。すでに誰がどのように働いているかは市当局が
知っているのだし、面接した上で、誰を不採用にするという訳じゃないから、形式的な集団面接
で良いでしょう。どのみち、一人ひとり氏名や住所、家族構成を明らかにする名簿は提出するの
だから。集団面接の上で、契約そのものは井上さんに一括して委任するという進め方でどうでし
ょうか」

雇用契約の日はあくまで確認書を交わした時点でないとした。五月十日からというのは市
と会社の契約であって、何日かの空白があって解決したのだから、この空白の期間は絶対に譲れ

ない。この四日間の空白が、後の「四日間の未払い賃金」請求事件の根拠となった。

交渉は最後の詰めが勘心である。特に「確認書」や「和解文」「空白の四日間」については、後日に紛議をひき起こさぬよう、しかも自分側が有利になるよう一字一句が互いに論議され、つばぜり合いの交渉が行われる。交渉団が腹案をもって再び市長会議室に戻った後、青木らは組合事務所待機することになった。

「私はこれで帰りますっけえ、もし重大なことが起こったら、いつでも連絡して起こして下さい」
水上が青木や市職の誰彼に会釈して帰って行った。

「水上さんも随分頑張ったからね。疲れてるんだらう。めっきり白髪が増えたんじゃないか」
「こっちは一つ終ってもまた一つ、埼委労との闘いが待ってるよ。こっちは病院のような大衆闘争ではなく、埼委労の「夜の帝王」相手のしんどい組織戦だから」

学委労の若手夜警達は気の重い笑いの中で明日からの「処分撤回」闘争に思いをはせた。「夜の帝王」とはある県立高校の教員が酒に酔って老警備員にからみ、皮肉まじりにののしった警備員の蔑称であった。

「そう言えば、埼委労の中の者から中山書記長や小林副委員長らがさっき越谷に向ったという連絡があった」

「なにっ、中山は何しに来るんだ」

「埼玉労は越谷市職とはけんかしたくない。処分前にKが越谷に来て事情を調べた上で、弾圧を回避するために処分した。今後とも市職と共闘し、東京ワックスへの支援は続けたいということ」で報告しに行くというのを、さっきまで書記局会議で話していたと言うんだ」

「ふざけるんじゃないぞ。闘いの真最中に権力が喜ぶような処分を下しておいて、今さらワックス支援だなど、どの面下げて言えるんだ」

「結成大会に委員長が顔を出しただけで、東一以外の役員や本部書記局の誰も何度要請しても一度も顔を出していないじゃないか。中山さんや小林副委員長が今さら越谷に来れた義理か。来たら追い返してやる」

憤激の聲が学委労の面々から次々に飛んだ。「ニードロップでもくらわせてやるか」とレイモンドが、おどけたように空手の必殺術を実演したので、大笑いとなった。

「まあ待ってくれ。KやI書記次長らも一人ではよう来ないから、中山さんや副委員長をかついでカッコ付けに来ようというんだろう。市職としてどう応待するか確めてみようじゃないか」

青木が怒りまくる夜警たちをなだめた。事情を聞いた市職の渉外役のTが困った様子で提案した。

「埼玉労とは今までも共闘関係があるし、皆さんとは埼玉労が処分しても共闘会議の大きな柱として今後もこの闘いはやっていかねばならない。埼玉労の書記長が見えても、うちの三役は今上

で重大な交渉中だから中座させる訳にはいかない。ここは私が埼委労のお話を承まわった上で引き取りを願うから、任せておいて貰えないだろうか」

Tに頭を下げられては仕方ない。市職には市職の立場がある。市職とはワックス闘争を続ける上で共闘関係を保っていかねばならない。埼委労の東一処分の発案者であるKやIに対しては組織内で決着をつければよいことである。ここは一つ我慢しておこうと学委労の面々は憤りを抑えて別室で待機することにした。

十時近くになって現われた中山らはTに対して「交渉に参加させてもらいたい」と尊大な申入れを行った。Tは「何を言いたすのか」と思ったが、「交渉団は共闘会議の全体会議で十分討議して選出したもので、私だって参加できないのですから」といねいに断ったという。

「もしご心配なら、どこかこの近くで待機頂ければ解決し次第、ご連絡いたします」

熊谷から来ている中山はもう帰る術もなく、市内の何処かに空しく宿をとったという。結局、翌朝になって彼らは「最終合意に達して、今文書確認を市長に求めている」という返事をもらってすこすこ引き上げた。

何度かの休憩をはさんで交渉は延々と続き、すでに三回目の午前零時がまわり、三日連続の徹夜交渉が続いた。今や交渉団も会社側も眼が血走り、頭はもうろうとしていたが、「労使間のあらゆる問題については、労使双方が誠意をもって自主的に話し合い、解決するものとし、他の者

の介入を許さない」という文言を巡ってしのぎを削る交渉をくり返した。一つの表現が相手から提案されたり、修正されたりする度に、双方が個別に協議した上で交渉が強行されていった。

いつの間にか夜が白々と明けて、東の空から太陽が昇り、市長応接室の窓から初夏の陽射しが一杯に入ってきた。最終的な文案に合意が達したのは、午前八時半の始業時間を過ぎていた。

助役が市長に最終確認を求め、OKのサインが出て労使双方と確認者（佐々木浩委員長）、立会人（山崎満州男事務局長、高橋努市会議員）が署名捺印をし、確認書を交換し終ったのは午前十時過ぎであった。

「それでは、今日は両方ともくたびれ切っているから、明日、病院で井上弁護士に立ち会ってもらって、集団面接した上で、集団で雇用契約を結び労働条件について話し合って下さい」

山崎が、双方の労をねぎらってあいさつし、交渉団はよろけるようにして地下の組合事務所に引き上げて来た。

万事解決の報せを受けて、東京ワックス労組組合員と共闘会議のメンバーが続々と組合事務所を訪めかけて来た。佐々木と井上が交互に長い交渉経過を改めて報告し、「確認書」のコピーが配られた。

「長い交渉でした。私も労働委員会での仲裁や和解交渉で徹夜は何度もしましたが、三日間ぶっ続けの交渉は初めてです。市職の三役も高橋さんや吉岡さんも皆頑張ってくれました。直営化と

確 認 書

越谷市立病院の総合管理業務（清掃、警備、電話交換）に関し、下記につき合意し確認する。

記

1. 越谷市立病院に勤務する東京ワックス(株)の従業員については全員を雇用する。ただし、希望しない者はこの限りではない。
2. 労働法を遵守する。
3. 労働三権を遵守し、不当労働行為は行わない。
4. 労働協約を締結する。
5. (株)日世内における労働関係のあらゆる問題については、労働双方が誠意をもって自主的に話し合い、解決するものとし、他の者の介入を許さない。

1980年5月14日

東京ワックス労働組合委員長 水上美之作
 代理人 弁護士 村上豊治
 株式会社日世代表取締役 内海静雄

確認者 越谷市職員組合
 執行委員長 佐々木

立会人 越谷市立病院
 事務局長 山崎満洲男

立会人 越谷市議会議員 高橋 芳高

越谷市職員組合

いう要求からすれば、不満な点は一杯あるでしょうが、ともかく市長と日世がぐるになって警察を導入して職場から皆さんを排除して首を切ろうとした。ともかくそれだけは阻止した。これからは皆さんがもっともっと団結して、会社の組合潰しと闘い、市に対して粘り強く直営化を要求して行って下さい。この確認書はそのほんの手がかりです。私たちにはこれが精一杯でした。皆さんがこれからもっと頑張ってこの確認書を上回る成果をあげてもらいたい……」

井上は感きわまったように絶句した。ワックス労組の組合員で嬉しさの余り泣き出す者もいた。堰を切ったような拍手が組合事務所一杯に湧き起こり、いつまでもいつまでも続いた。

「ほんと疲れちゃったよ。身体があっちこっちがぬきゅぬきゅ、ぬきゅぬきゅして気持ち悪かんべ。ちよっくらサウナでもいって垢を落すべえよ」

「まあ、それくらいならバチも当らねえだろう。丸三日間以上寝てないんだからな」

佐々木と野田は報告会が済むと連れだつて市内のサウナに出かけた。初夏の陽射しの中で陽炎が燃え立つようにアスファルトにたちこめ、旧日光街道沿いの宿場町の低い屋並みが目の前にかすむようであった。

「青木さん、どこもかしこも真黒じゃ。人手は足りんし、どうしようか」

病院に再結集した組合員の目には、この十日余り掃除が行き届かず、汚れた廊下や病室が飛び

込んできた。警察がいつ入るか分らない恐ろしさの中で座り込みや団交に一日中飛び廻りながら、少しでもあいまをぬって必死で掃除してきた積りであった。だが、この十日間、一度も洗剤ワックスをしていない床は、誰の目にも黒ずんで汚れていた。

「今日から早速やりましょう。幸い、今日は大勢の仲間が来ている。今夜の勤務まで間があるから全員で手伝おうじゃないですか」

藤本が張り切って腕まくりをした。モップやサニ―など初めて手にする若者たちだったが、頭数だけは揃っている。小母さんたちに仕事の要領を教わりながら、下手くそだが、馬力だけはかけて夕方まで働いた。闘争が病院の床に残した傷跡は刻一刻とうす紙を剝ぐようにきれいになっていった。

「私もやればできるんですね」

夕方になって、藤本が我ながら感心したように言ったので小母さん達は笑い出してしまった。

「これくらいで何言ってるんだね。明日からはもっともっと頑張ってもらいますからね」

事実、この援掃は六月上旬の完全解決まで一ヵ月近く続くことになった。